

さる程に水馴竿沖津、烏賊幟飛子、女貞木袖垣らは夏女、山桃を山の砦へ誘って、俄かに酒宴を設けつつ懇ろにもてなす程に、夏女は三人の勇婦らにうち向かい三世姫の御事を詳らかに説き示し、小蝶、大箱らが忠義の趣をこれかれとなく告げにければ、袖垣、沖津、飛子らは聞く事毎に感服して、

「我も予ねてより江鎮泊に赴いて彼の姫上に仕えばやと思わざるにあらねども、縁無ければ疑われてその事調い難かるべしと、さすがに遠慮しはべって、さて今日までは黙止たり」と云うを夏女は聞きながら、

「いかでかはさる事あらん。小蝶、大箱の刀自たちが人を容れたまう事は海に異ならず。さるにより江鎮泊には既に数千の兵あり。京よりも鎌倉よりも容易く討つ手の軍兵を差し向けられざるをもて、その勢いを察したまえ。ここにはべる山桃殿も未だ我が砦の者にはあらず、不図せし事にて名乗り合い、その志にて江鎮泊の群れに入らまく欲う思える事をしかじかと聞こえしかば、かくは伴いはべるなり。和君達も此の砦を捨てて彼処に赴きたまえ。小蝶の刀自も大箱の刀自も喜んで用いたまわん。この儀に従いたまいね」と又、他事も無くすすめしかば、三人の勇婦は喜ばしげに等しく微笑み額を撫で、

「宣う如くなるならば、我々この所を立ち去って彼の姫上に仕えまつらん。手引きを頼み奉る」と云うに夏女は頷いて、

「その儀は心易かるべし。私が確かに請け合うたり。さりながら、私はしかじかの儀によって指神子を迎えるの為に吉野の里へ赴くなり。著の刀自を迎え取り、帰途に立ち寄りけるべし。その頃までに用意して、必ずよ待ちたまえ。その折近江へ伴うべけれ」と云うに三人の勇婦らは皆喜んで約束しつつ、「しばらく休息したまえ」とて、夏女、山桃を両三日、留めて日毎にもてなしたれども、さて在るべきにきあらざれば夏女は袖垣、沖津、飛子らに再会を契り別れを告げて▼又、山桃を伴いつつ、折から日和も吉野なる山里指して立ちいでけり。

○かくて夏女、山桃が大和の鳥捕の辺まで来にける折、齡は二十歳余りにて赤ら顔なる一人の女が下女に包みを持たしたる後には柳箱を担ぎたる下部も一人従いて、小路を此方へ来るあり。そを知れる人と覚しくて、道行く者の噂を聞くに、その女は医師の姪にてをさをさ武芸に優れたり。よって当国の守より今日御館へ召し寄せられて、女武者頭になされる由を仰せ付けられたりしなり。されば上よりも大方ならぬ引き出物を賜りつ、又、女武者よりも物多く贈られたれば、供人にかき担わして只今宿所へ帰るなり。その身の芸故にはあれども女にして武士に等しき誉れにこそとどよめいて見返り見返り行き過ぎける。かかる所にここに名だたる暈砂利と呼ばれたる悪者つくりの一人の婆が女乞食を引き連れて、先に立ちつつその女を呼び掛けながら押し止め、

「やよ刀自。今日は目出度うも、えらく出世をしたまいしな。ここの小屋の婆嬪らが祝儀を貰ってくれと云えば否と云われぬ苦勞性。わしに免じて良い程に取らして、去なして下され」と下から仕掛ける強請(ねたり)の魂胆。その女は見返って、

「此は思い掛けも無き事を好みし。そなたの裁判、貰うべき筋あるならば宿所に来てこそ云うべき人を頼んで途中にて割無く強請るはいかにぞや」と云わせも果てず声苛立てて、

「高の知れたる乞食に祝儀、宿所も途中も入る事かわ。頼まれたれば引くにも引かれず、わしに免じて良き程に早く取らせて去なしやれ」と氣負いかかれどちっとも騒がず、

「そは聞き分け無し。そなたは又、何人なれば馴れ馴れしく強請りがましき取り持ちするや」と詰るを聞かずあざ笑い、

「何じゃいの白切って。ここら辺りで名の売れた此の暈砂利を知らずとは啞か聾か明き盲人か。婆アらよ、俺が控えている、貰え貰え」とけしかける声にむらだつ百囀り、乞食女が汚きを身知らず、皆がやがやと罵って、はては手を取り袖袂と纏いかかるを「此は狼藉や」と払えど聞かず悶着したる隙を得たりと暈砂利は早く後ろへ立ち巡り、その女に組み付いて、しっかと締めて動かせず、その隙に氣早き乞食ら両三人が立ち別れて驚き騒ぐ、下女、下部の包みと柳箱をかきさらい、足に任せて逃げ行くを主は遙かに見返って、あなやと思えど前よりは数多の乞食が掴みかかり、後ろには暈砂利婆が抱き付き取り留めて、ちっとも離さざりければ、さすが武芸に疎からぬ勇婦なれども自由を得ざれば栓方も無く見えたりける。

かかる所に年なお若き▼柴売りの女商人が先より行き来の諸人に立ち混じって暈砂利婆らの狼藉を苦々しげに見つつ居りしが、こらえかねけん頭の上に戴き持てる幾把の柴を振り落とし投げ捨てて、怒れる声を振り起こし、

「この悪者らが大胆なる狼藉すな」と罵って、群立ち氣負う女乞食を当たるに任せてかい掴み、礫に取って投げ退け、なおも進んで暈砂利婆の襟髪掴んでねぢ倒す、思い掛け無き助けを得たるその女は既にして進退自由を得たりしかば、柴売り女と諸共に早二三人投げ伏せて、やや身を起こす暈砂利婆を一当て当てて蜻蛉返らせ、柴売り女にうち向かい、

「名さえ面も見知らねども縁にもます情けの働き。喜び述べも尽くし難かり。私も武芸に疎くもあらねど、あの悪婆に後ろを取られて進退自由ならざりしに、向かいに群立つ乞食らが多かりければ制しかねたり。さればとて大人げ無く斬って捨てんはさすがにて、ほとんど難儀に及びしに、助力によって当座の恥辱を清めたるこそ本望なれ。私は此の度、国の守より女武者頭に成されたる夏楊と云う者にはべり。面の色が薄赤ければ人あだ名して病葉の夏楊と云いはべり」と名乗れば柴売りは会釈して、

「此は懇ろなる御挨拶。かばかりの事に浅からぬ仰せは有り難くはべり。私も宿世の幸無くて女に生まれはべりしかども、魂は益荒男にも劣らじと思うにより、善に與して悪を懲らし人の為に身を惜しまねば、人遂にあだ名して命不知の岩飛葉と呼びなしてはべるかし」と云いつつ辺りを見返って、

「あな無惨や。悪者らは一人も残らず逃げ失せたり。供人たちが奪い取られし包みと箱はいかにかしけん。さあ追いかけて取り戻したまいねかし」と急がせば夏楊「実にも」と頷いて、行かんとしたる後ろの方に隠れて様子をうかがうたる乞食女ら両三人。どつこい遣らぬと組み止めるを左右へどつさりすかさぬ手練。残る一人を岩飛葉が手玉にはたと犬子投げ。起きんとするを踏み据えて、

「ここ構わずに」と頼もしき言葉の花や唐土の吉野に近き鳥捕の鷹なら鳴くに晝鶯の後を慕って追って行く、されば残れる乞食らはなお懲りずまに身を起こし、打たんと進む拳の稲妻、雷婆に夜だち嬢、黒雲女郎諸共に三人がかりに負け腹立ち、▼掴みかかるを打ちのめらせて、或るいは蹴倒

し踏みにじる激しき手練しゅれんによれるが如く、「許せ、許せ」とばかりに逃げ足早き鼠舞ねずみまい、頭こうべを抱えて蜘蛛の子を散らすが如く逃げ失せけり。

岩飛葉いわひばは遙かにうち見やって、からからと笑いつつ、

「身の程知らぬ悪たれどももあれで少しは懲りつらん」と一人語ひとりごちつつ取り捨てし柴ゆの結び縄引き結び、再び頭こうべにうち乗せて立ち去らんとする程に、先より方かた辺へに佇たたずんで初めより終わりまで見つづ感なつめずる夏女いわひばらは忙いわしく進おんみみ寄り、岩飛葉いわひばにうち向かい、

「先より彼処えがたに立ち留まり、思おとこわず見たる御身おんみの働えがたき。女には多く得難おとこき男おとこ魂おとこの頼おとこもしさよ。今夏楊なつやぎとか云いう女じょ中ちゆうに名乗なりたまおんみいしを方かた辺へ聞おんみきして御身おんみの名いさえ、岩飛葉いわひば殿いとは既いに知いりにき。しかれどもかく窶やつれ々しく※世ねんごを渡いる人い柄いならず、女いの朱買臣しゅばいしん※とや云いわん、願つばうは詳うらに氏素性うじずじようを聞いかまく欲ねんごしうこそ」と云いう事いうやうやしく懇いろなるに、岩飛葉いわひばは驚いき小腰いをかがめて、  
「此こは思いい掛かけも無なき御見出おんみしに預おんみかって、裏おんみ恥ふたはずかしくはべるかし。そもそも御身おんみ二ふた柱はは元もとこれいかなる方かた様さまなるぞ」と問ない返なされるに夏女なつめは答こえて、

「人の素性すじようを問いう時はまず我わがが名なを乗のると云いえば、今更何なを包みはべらん。なれども、ここは道中みちなかなれば、さすがにはばかり無なきにあらず。いざたまえ、そこらに酒樓しゅろうがあるべきに共に一いっ献酌けんしやくのみはべらん」と云いうに岩飛葉いわひばは否いなみかね、うち連れ立あてて行く程に、此この辺へりには仕出あし屋やとか云いう酒売さかる店みはあらずして、手打てち蕎麦屋そばやが在ありしかば三人みはそこに立たち寄よって蕎麦そばを打うたせて、それを肴さかなにさかずききを巡めぐらしけり。

その時岩飛葉いわひばは夏女なつめらにうち向かい、

「先には問たわれ奉わらわりし私すじようの素性おんみをしかじかと告おんみげるも面無おんみき業わざながら、親びぜんは備前かみの守ゆきえの行家主いに仕つかえたる譜代ふだいの郎党ろうとうにてはべりにき。行家主いは文治ぶんじの頃ゆきえ、あえなく討うたれたたまいしかば親いは浮世うかりを忍いびつつ、去いぬる年世ゆきえを去いりたり。故ゆきえに故郷わに住いみ詫ゆかりびて、この地ゆかりにちどの縁ゆかり在いりしを心こ当あてに来いにけるに、その人みまかは身みまか罷いって家いさえ在いらずなりしかば、更いに行方ゆくえを定さめかねたる路用ろようも使い果あたしつつ、栓方すずの無なきまなに日毎すに柴いを売いり歩いき、その日いを過すごしはべるなり。女いだてらに幼なきより武い芸いを好いみはべりしかば、親いの太刀筋たちすじ、柔やわらの手いさえ見習みっていはべれども、世渡たつきる便い宜いになるにもはべらず、とてもかくても仕合いわせ悪いき我わがが身いにこそ」と来こし方かたをいとしめやかに告なげしかば▼夏女なつめはしきりに感嘆かんとんして、

「しからんには江鎮泊こうちんぱくの三世さんせ姫ひめに仕つかえたたまえ。私わらわは彼かの砦とりでの女武者なつめ夏女なつめと呼ばれる者なになん。  
相あ伴いいしこの女じょ中ちゆうは呉藍くれいの山桃さんとうとて、此この度とりで砦とりでへ同どう道どうする勇婦ゆうふにてはべるかし」と引いき合あわせれば山桃いも向後きやうごを契しって賤しずの砦とりでへ参まいりたまえとすすめけり。かかる折なつやぎから夏楊なつやぎは人数あまた多い伴いって、岩飛葉いわひばを尋いね来いてひとしく二階いへうち上いり、岩飛葉いわひばを呼いび立あたせ、先いの喜いびを述いべなどす。事いいと騒あがしうなりければ、夏女なつめはついで悪あしかりけりと思いえば山桃いに目あを配あらせて、事いのまあぎれに別あれも告いげず、やがて下屋しもやに下ありたあって、主人あるじに蕎麦あたい、酒いの値ひそを取いらせ、両人い密ひそかにうち連れだいって吉野よしのの方かたへ赴おもむきけり。

さる程わくらばに病葉なつやぎの夏楊いは岩飛葉いわひばにうち向かい、

「私わらわは先かに彼かの晝ひ鷲とびらを隙間げも無いく追しっかけしに、供いの下女げと下部しもべらは早いく宿所しゆくしょへ走いり帰いって、事いしかじかと告いげしにより、私わらわの叔父おじは驚いいて御館みたちの組くみ子どもを語いらいつつ、彼方かたを指いして走いらせ

て私の助けにせられしかば、八方へ手分けして乞食女らの行方を尋ね、奪い取られし柳箱も包みも全て取り返したり。かくて御身を尋ねしに、ある人教えて、この蕎麦店に居たまふ由が聞こえしかば、由を御身にたく告げて、且つ喜びの盃をすすめん為に来るなり」と云うに岩飛葉は喜んで、「そは首尾宜しき事にはべり。私は思い掛けも無く旅行く二人の女たちに呼び掛けられ、伴われてここにて酒を盛られはべり。しかるにその女たちは只今御身が数多の人を伴って来たまひしかば、早くも外して出て行きにき。それも故ある事なるべし」と云うはしに夏楊は蕎麦をあつらえ酒を出させ、更に岩飛葉にこれをすすめ、さて雑兵、組子らにも酒を飲まして帰し遣わし、なお岩飛葉をもてなしてその素性を尋ねるに、岩飛葉は隠さずにしかじかとその身の上を告げしかば、夏楊いよいよ捨て難き思いあり。これにより義を結んで姉妹たらん事を誓うに、岩飛葉は二十四才、夏楊は二十一なれば、やがて岩飛葉を姉ととなえて共に喜びを尽くしけり。

かかる所に夏楊の叔父なりける医師持井常庵と云う者は夏楊の事を心元無しとて後を慕ってここに来て、岩飛葉の事の趣、又、夏楊と義を結んで姉妹となりにし由を聞きつつ腹の内に思う様、「……我が姪はかかる勇婦と交わって、共に姉妹の思いを為せば真に良き助けなり。此の岩飛葉は他郷の者にて寄る辺あらずと云うなるに、今より我の宿所に在らしめて生業を為さしむべし」と思案をしつつ思う由をしかじかと告げしかば、夏楊は一議に及ばず、共にすすめて止まざりし。人の情けをかにかくと否むべきにあらざれば、岩飛葉は喜びを述べてその意に任しつつ、常庵、夏楊らに伴われ、その宿所にぞ赴きける。

そもそもこの夏楊の親なりける者は世々当国の守に仕えて武芸の達人なりけるが、身罷って早年頃を▼経たり。継ぐべき男子無きにより、その家一旦断絶せし時に夏楊の叔父なりける持井常庵は同家中の医師の家を継ぎて居り、ここをもて夏楊は叔父の宿所に迎え取られて同居してありけるに、女ながら幼き頃より親の武芸を受け継いで、男魂ある由が国の守へ聞こえしかば、此の度新たに召し出されて女武者頭にせられしなり。

あだし事はさて置きつ(閑話休題)、さる程に常庵は夏楊と諸共に岩飛葉を伴って、やがて宿所に立ち帰り、側女なりける遣水に事の由を説き示し、岩飛葉を引き会わせけり。此の時常庵は齢五十路余りにて、本妻は早く世を去り家には遣水と云う側女あり。年なお三十路ばかりなるが、顔形醜からねば常庵は深くこれを愛して萬を任せたりしかば、遣水は何事もおのがままにまつりごちて、さながら本妻に異ならず。しかれども夏楊は常庵の兄の娘にて男魂ある者なれば、只これにのみ心を置いて、なおざりならずものしけり。

かくて常庵は遣水、夏楊らと談合しつつ、母屋を離れてささやかなる空き家の在りしをかき払い、この所を岩飛葉の部屋と定め、女には相応しからぬ柴売りをしたらんよりいとほりにても売りたまえとて、ちとの元手を貸しにければ、岩飛葉は是よりして日毎に糸針を売り歩き、暇ある折々は夏楊とうち語らうを楽しき事に思いけり。

※窶々(やつやつ)しく：ひどくやつれている。みすばらしい。

※朱買臣(しゅばいしん)：中国、前漢の政治家。家貧しく、薪(まき)を背負いながら読書に励んだ。

○されば又、夏楊は山桃を伴って吉野山の麓に赴いて隈無く著を尋ねしに、絶えて在処の知れざれば一度近江へ立ち帰り、由を小蝶、大箱に告げ知らせ、又こそ来めと思案しつつ、帰途に袖垣ら

とりに 砦へ立ち寄り、おきつ とびこ つわもの 兵を引き連れて、しず とりに 賤の砦へ帰りけり。

○さる程に岩飛葉はある日商い果てて帰り来て、部屋に入らんと戸を押し開くに、いつの程にか我が物はこと如く取り納めて、空き屋の如くなりしかば、「此はいかに」といぶかって、つらつら心に思う様、

「・・・夏楊こそ隔ても無くいつも心が変わらねども、主人の側女の遣水などは私をいぶせく思うをもて、出て行けがしにかくの如く部屋を片付け置きたるならん。要にこそあれ」と思案をしつつ、やがて母屋に赴いて▼常庵に別れを告げ、

「月頃は浅からぬ御陰をこうむりはべりしが、止む事を得ぬ事がい出来て、故郷へまかるなり。身の暇をたまえかし」と云うに常庵は驚いて、

「和女郎は部屋をあのかく取り片付け置きしを見て、出て行けがしと云わぬばかりの計らいならんと推量して、かくは別れを告げたまうか。更々云う訳では無し。明日、明後日は我が養父の二十五回忌に当たりたり。明日は大逮夜なるをもて、菩提所の住持を迎えて経を読ませんと思うにより、その供人を置かんとて和女郎の部屋を片付けたり。しかるに明日は当番にて、我は終日宿所に居らず、夏楊も又、御館の女中の稽古日なれば、彼女も宿に居り難し。留守には遣水のみなれば、和女郎は萬に心を付けて、もてなしてたまわれかし。この儀を頼み参らす」と又、他事も無く云われるにぞ、岩飛葉はたちまち疑い解けて異議に及ばず受け引いて、そのままここに留まりける。

○かくて次の日の未の頃、菩提所の陀楽院の住持の波海和尚が弟子の法師と供人を引き連れて来ければ、遣水は常よりもいと艶やかに化粧してしとやかに出迎えて、時候を述べつつが無きを祝しつつ、四方山の物語りして懇ろにもてなしたる言葉の末に何と無く訳ありぬべき心が現れ、互に見る目のいやらしさ、唯ならずとは知られけり。かくて波海は持仏に向かつて、弟子の法師諸共に経を読み回向し果てて、用意の非時※を賞玩し、布施物を受納して、まず弟子をのみ帰し遣わし、主人の帰るを待たんとて、納戸に入って遣水と別席の酒宴を設け、差しつ差されつ余念無く、そこに枕を並べたる悪事の程こそ無惨なれ。岩飛葉は初めより事の様を推せしに、今又、淫婦悪僧が納戸にて忍び逢いぬるを垣間見て怒りに耐えねば、密かに刃を携えて斬って四段になさんずと、抜き足しつづつかがいけり。

※来し方(こしかた): ①通ってきた所・方向。②過ぎしてきた時間。過去。

※非時(ひじ): ①戒律によって僧が食事をとるべきではないと定められた時間の食事。非時食(ひじじき)。②会葬者に出す食事。しのぎ。

けいせいすいこでん 第十編ノ二 きょくていばきん うたがわくにやす  
傾城水滸伝 第十編ノ二 曲亭馬琴著 歌川国安画

その時岩飛葉は悪僧波海と遣水を斬って四段になさんずと心しきりに逸りしをつくづくと思ひ返せば、

「我今奴等が汚れたる体たらくを見ると云えども、この事を未だ主人にも夏楊の刀自にも告げずして、怒りに任して斬り殺せば事を好みし者に似て、大人しからずと人もや云わん。そのみならず常

庵殿は遣水の色に迷ってしまわされたる事なれば、返って我儕を恨みもせんか。今宵はまず見逃して折をもて夏楊に告げ知らせ、彼の刀自の旨をも問うて後に又、栓術あらん」と思案をしつつ密かにそこを退いて、この夜を無事に明かしけり。

○これよりの後、遣水は折々墓参りにかこつけて陀楽院に赴きつつ、その波海と忍び逢い、波海も又、常庵、夏楊らが宿所に居らぬ暇毎に来つつ遣水と密会す。云わんや又、主人の叔父、姪諸共に国主の御館に宿直して、一夜さ居らぬその夜には遣水は密かに波海を引き入れて夜すがら枕を並べつつ、楽しみを為すと云えども下女の二焼と弟子の牟残はこの事を取り持って、よくその内外を防ぎしかば、常庵も夏楊もかかるべしとは夢にも知らず、只岩飛葉のみ始めより心を付けて事如くこれを知らずと云う事無ければ、いと浅ましく思えども告げるに折を得ざりしかば、本意無く日頃を經る程に、ある夜波海が又、忍び来て遣水と語らうを▼岩飛葉立ち聞きしてけるに、遣水が云う様は

「とてもかくても心長閑けく、御身と逢う事いと難かり。夏楊殿は御館に召されて女武者頭になりたれば、主人にすすめて別宅さすべし。さる時は岩飛葉をも諸共に遣わして、まず目の上の瘤を除かん。この儀はいかが」と囁けば波海は聞きつつ頷いて、

「その計らい極めて妙なり。なれども主人の親爺めを長くこの世に在らせては互いに寝覚め安からず。まず夏楊と岩飛葉を遠ざけて、その後常庵を毒害して幼き者を養子にすれば、寝かさんとも起こさんとも御身と我らがままなるべし。さればとて逸るべからず。心静かに謀る時は疑われずして為し易かり。よくしたまえ」とぞ囁きける。岩飛葉はこれを聞きすまし、驚きつつ退いて腹の内に思う様、

「・・・悪僧淫婦の悪巧み、事早ここに迫ったり。我が身は主人の恩を受け、夏楊とは義を結びたる姉妹にてある者を今これをしも告げ知らせずば我も恩義に背く者なり。方辺に人無き折もがな」と事の便宜を待つ程に、その次の日は糸針の商いにもいはず居りしに、夏楊は常よりも早く御館より退いて岩飛葉の小部屋を訪れ、

「私は近頃、勤めにまぎれて久しく産神の社へ詣でず、御身も折良く宿所に居ませば、いざたまえ。諸共に詣でるべし」と誘うにぞ、岩飛葉は聞いて一議に及ばず、忙わしく着物を着替えて諸共に出て行きけり。

かくて夏楊は産神の社に詣でて漫る歩きをする程に、物欲しうなりしかば地内に名だたる即席の料理酒屋に立ち寄って、岩飛葉と共に飯を食へ酒肴をもいださせて盃を巡らす程に、岩飛葉は物思わし気にしばしば嘆息したりしかば、夏楊これをいぶかって、

「かく偶さかなる物詣では互いに保養の為なるに、いかなる事が心に掛かって、かく侘びし気に見えたまうぞ」と問われて岩飛葉は形を改め、

「問われずとても告げんと思ひし一大事がはべれども、折を得ざれば胸にのみ一人奇ちつ今もなお、ついで無ければ云いいでかねて、うち侘びたるにぞはべるなる。その事は斯様斯様」と遣水、波海の不義の趣、彼らが示し合はしたる毒害の密義まで落ちも無く告げにければ、夏楊は驚き怒って、「それは安からぬ事なりかし。もし我が叔父に災いあれば、臍を嚙むとも及び難けん。速やかに遣水を厳しく責めて白状させ、守へ訴え奉り、彼の悪僧と諸共にハツ裂きにしてくれんず」と逸るを岩飛葉は押し止め、

「密通は男女諸共に捕らえざれば証拠無し。さるを一旦の怒りに任して、彼の婦人を責めたまうとも、いかでかは白状すべき。まず何事も胸に秘めて、叔父御にも知らせたまうな。叔父御の宿直番の夜に、御身も宿直の当番なりとてその夕暮れより宿所を出て、内の様子をうかがいたまえば、悪僧必ず忍びて来るべし。その折に二人を斬り殺して、後に叔父御に告げたまえ。これ最上の計らひならん」と忍びやかに諫めしかば夏楊は僅かに怒りを納めて、「御身の意見は最も良し。さらばその儀に従うべし」と答えて酒屋の小者呼んで値を取らせて、岩飛葉と諸共に立ちいづるに、早黄昏て夕月の影は隈も無く明かりけり。

かかる所に宿所の下部が尋ね来て、

「只今御館より、奥方様の御使いを立てられて俄かに召されたまうなり。由を知らせ申さんとて御迎えに参りたり」と云うに夏楊は▼頷いて、

「しからは我が身は此の所より早く御館へ参るべし。姉御は宿所へ帰りたまえ」と云うに岩飛葉は心得て、別れを告げて只一人、家路を指して帰るにぞ、夏楊はその下部を従えて忙わしくそのまま御館へ参りけり。

○しかるに当国の守の奥方には今宵の月を賞せんとて、辺近く仕えまつる女房を皆集えて酒を飲まして興じたまうに、女武者頭の夏楊こそ此上無き上戸にてはべるなれと申す者がありしかば、しからは夏楊をとく召せとて宿所へ使いを下されたり。さるにより夏楊が御前に参りしより、いとも多かる女房らが立ち替わり入れ替わり相手になって強いたりしかば、夏楊は思はず酒を過ぐして席にも絶えずなりしかば、様々にいろい申して身の暇をたまわって、その夜のハツの頃おいにようやく宿所にまかりしかば、常庵はとく眠って下女の二焼も臥して居り、この故に遣水一人が起き出して、

「此はいと遅くはべりにき。物欲しうは御座さずや。臥所は二焼が先の程に敷き設けはべりにき。さあさあ休らいたまいね」と云わせも果てず、夏楊は胸に遺恨が耐え難く、酔いに任しつ我を忘れて眼を怒らし声苛立てて、

「畜生女めが何をか云う。汝は我が叔父に愛せられて、本妻にも異ならぬ恩を忘れて悪僧と詛ある由は我良く知りぬ。明日は守へ訴え申して思い知らせん。覚悟をせよ」と勢い猛く罵るにぞ、遣水はひどく恐れて頭を垂れて答えもせず、夏楊はかく罵って、そのまま臥所に入るより早く前後も知らず臥したりける。

かくて次の日の巳の頃に夏楊は目を覚まして、遅くも朝寝をしたりけり、と思えば忙わしく起きいでしに常庵は病家へとて出て、この時は宿所に在らず。夏楊はつくづく昨夜の事を思い見るに、酔いに任して遣水を罵ったりと覚えたり。我れ何事を云いたりけんと思えば心は安からず、方辺に人の無き折に遣水を招き寄せ、

「昨夜私は御館にていたく酒をたまわって、我にも在らず酔いたりき。さるによりそなたに向かつて、良からぬ事を云いたるか。何事も得覚え。何とか云いし」と尋ねれば遣水たちまち涙ぐみ、「昨夜御身は罵って、私を不義よ、悪戯者よと、濡れ衣を着せたまいにき。此は必ず岩飛葉が讒言せしにぞ、あらんずらん。この事ばかりは予てより云わじと思いはべりしが、云わねば済まぬ秘め事を告げ申さんに聞きたまえ。あの岩飛葉は何時しかに御身の叔父御に据え膳して、私を罪ない追い失って、早くその身が本妻にならんとする心の底の穂に現れて見えしかば、私も腹に据えかねて

▼ひどく罵り恥ずかしめたる事もあるを遺恨に思つて、さては御身に囑賂をかつて(そそのかして)、返つて私に不義悪戯があるが如くに云いなしけん。心の程こそ怖ろしけれ。あの岩飛葉が旦那に仕掛けしその事の体たらくは斯様斯様」と無き事を有るが如くに云いくろめたる言葉巧みに欺きけり。夏楊は男勝りの氣早き勇婦なりけれども智恵才覚は岩飛葉に及ぶべくもあらざれば、今や遣水に説き迷わされて思わずも大息ついて、

「人は見掛けに似ざるものかな。我が身は岩飛葉の義勇を感じて姉妹にもます思いを為せしに、彼奴は漫ろに欲に迷つて、年の齢も相応しからぬ我が叔父の本妻にならんと謀りしのみならず、義に背き人を強いて、我をあくまでたばかりたる巧みの程こそいと憎けれ」と息巻き猛く罵るを遣水わざと押し止めて、

「その腹立ちは無理ならねども、怒りに任して荒立てたまえば旦那の面皮も欠けたまわん。只穩便に計らいたまえ。その叔父君の為なるべし」と道理めかしてなだめけり。しかれども夏楊は尚も怒りが収まらねば、次の日下部に云い付けて、岩飛葉に貸した小部屋の物をこと如く取り捨てさせて、後には薪、炭俵を多く積み入れさせたりける。

○岩飛葉はかくとも知らず、その日も朝とく生業にいでたるが、帰つて見れば我が部屋は薪小屋になつてあり。かかる事にも思慮深き者なりければ、その意を悟つて、

「……此は夏楊が彼の機密を漏らして、遣水にたばかられ、私をひどく憎めるならん。しかりとも今ここにては明き暗さを云い説き難し。要こそあれ」と思案をしつつ、そのまま主屋に赴いて、「私は俄かに用事が出来て、故郷へ赴くなり。月頃の恩情は今更言葉に尽くし難かり。又、帰り来ればその折に御恩を返し奉らん」とさり氣無く云い置いて、忙わしく出て行きしが、かけ離れたる裏町の旅籠屋に宿りを求めて密かにここに逗留しつ、夜な夜な出て常庵の宿所の辺に立ち忍び、事の便宜をうかがいけり。

さる程に悪僧波海は常庵、夏楊諸共に宿直の当番なりける夜に、又、忍び来て、遣水と夜すがら戯れ楽しみけるを岩飛葉はよく見届けて、彼がいつるを待つ程に、その明け方に波海の弟子の青法師牟残と呼ばれる者が只一人で潜り門より忍び出て、あちこち辺りを見渡すを岩飛葉すかさず引き捕らえ、手に短刀をひらめかし、

「汝もし、声を立てれば、只一抉りに息の根止めん。宵より波海が忍び来て、奥に在る事は我れ良く知つたり。事の様子をつぶさに云え。云わずば目にも見せん」と胸に切っ先を突き付けて、いとも厳しく責め問いければ、牟残は恐れて声を震わし、

「姉御、我らを▼許したまえ。知られたならば隠すに由無し。我が師の坊が忍び来て、遣水に逢う時はそれがしも又、従い来て、下女の二焼と密通しつ、帰る時にはかくの如くにそれがしが先ず庭に出て、辺り、隣、行き来の人が見る者あるかと見渡して、様子良ければ此の木魚を鳴らして合図を致すなり。されば我が師の坊が此の木魚の音を聞いて密かに出て帰る故は近隣の人もこれを知らず。内の人目は馴れ合うたる二焼が常に防ぐをもて、主人常庵にも夏楊にも知られる事は候わず」とつぶさに白状してければ岩飛葉は聞いて頷きつつ、

「しからば汝はその衣を絹をも脱いで我に渡せ。否と云えば一打ちぞ」と持てる刃をひらめかせば、いよいよ恐れて異議に及ばず、おめおめとして着る物を残らずそこに脱ぎ捨てしを岩飛葉は取つて肩に引き掛け、



「今は汝に用は無し。いでや暇を取らせんず」と云うより早く、牟残の細首を水もたまらず討ち落とし、その木魚を取り上げて、ほとほと打ち鳴らせば、しばらくして奥の方より波海は襟巻きで面を包み、潜り門より出て行くを一反余り遣り過ぎて、岩飛葉は早く引き捕らえ、又、短刀をきらめかし、

「汝は我を見知ってあらん。声を立てれば一打ちなり。汝が月頃遣水と忍び逢う体たらくは牟残が既に白状したり。命惜しくば着る物を残らず脱いで我らに渡せ。さあさあせよ」と急がしたり。波海は牟残が討たれしを一目見しより、いよいよ益々、魂も身に添わず、

「それがしがふとせし迷いによって、遣水と密通せし事は今更陳ずるに言葉無し。命を助けたまいね」と云いつつやがて衣を脱ぎ、絹をも脱いで渡すにぞ。岩飛葉これをも肩に掛け、仏衣を汚せし陀楽院の破海、牟残は名詮自性(名が性を表すこと)なり、仏罰思い知るべしと罵も終らずひらめかす刃の光り諸共に波海の首は落ちにけり。

かくて岩飛葉は思いのままに二人の悪僧を仕留めしかば、証拠の為に衣と絹を取り収めつつ、足早に宿りを指して帰りしを知る者絶えて無かりけり。しかるに此の明日、下者の鯛四郎と呼ばれたる魚商人が未だき買い出しに行かんとて板台を引き担ぎ、常庵の背戸の辺を只一人過ぎる程に、薄暗かりの事なりければ思わずも血潮に滑って、あふこ☆に掛けたる板台をたちまちはたと投げ捨てて倒れてあなやと叫びけり。

明け六つ頃にてありければ、その辺の町人らは此の声に驚いて、各々立ち出てこれを見るに、二人の法師が斬り殺されたる死骸の辺に一丁の魚包丁を突き立てて、その鯛四郎が血にまみれ、うごめきつつ起きんとせしを皆々折り重なって厳しく縛めて事の由を詮索するに、鯛四郎は驚き陳じて、「人殺しにはあらず」と云う。とかくする程に常庵も御館より退き帰って、初めてその死骸を見るに、我が背戸近き辺にて斬り殺されたる二人の僧は菩提寺の住持波海とその弟子牟残なりければ、驚き呆れ、且つ哀れみ、町人ら諸共に鯛四郎を引き立てて、国守の廳へ訴えけり。

これにより鯛四郎はしばらく牢屋に繋がれて厳しく詮索せられしかども、人殺しならざる由の言い訳が分明なりければ、さては盗賊の業なるべしとて許して放ち歸されけり。さる程に遣水は下女の▼二焼と諸共に波海、牟残が歸るさに殺されたりし体たらくを聞きもしつ見もせしより、心密かに驚き恐れて、と様こう様思えども思いかねつつ人知らぬ胸を千々にぞ苦しめける。

されば又、夏楊は波海、牟残を殺せし者を岩飛葉ならんと推しつつ、一人心に思う様、「……先には我が身を誤って、遣水に欺かれて返って彼の人を追いやりしを、云い説く証拠無きにより争いもせず立ち退いて、彼の悪僧が遣水に忍び逢ったる絹々☆に背戸にて殺して偽りならぬ証拠をそこに見せたるならん。かかれば我が姉岩飛葉は近き辺りに居るならん。会って此の身の過ちをいかで詫びん」と思案をしつつ、それとは無しに日毎日毎に一人巷に立ち出て、漫ろ歩きをする程にある日後ろの方に人あって、

「病葉の刀自、何方へ行かせたまうぞ」と呼び掛けるを忙わしく見返れば、これはすなわち岩飛葉なり。夏楊は恥ずかわしさに思わずも額を撫でて、

「此は姉御にて御座せしな。先に私は酔いに任して彼の密談を漏らせしかば、遂に遣水に謀られて御身を疑い、つれ無く物せし過ちを許したまいね。されば御身は事の証拠を示さん為に、我が背戸にて密かに彼の悪僧らを殺したまいしにあらずや」と云えば岩飛葉は頷いて、

「真に推量せられし如く、叔父御の為、御身の為に我儕は彼の悪僧らをかたの如くに討って捨てたり。なお物語り多ければ、いざ我が旅宿へ来たまえ」とて先に立ち誘って、その身の宿と定めたる旅籠屋に伴って、忍びやかに波海と牟残の衣と絹を取り出して、そを夏楊に指し示しつつ、彼らの白状の事の趣を斯様斯様と落ちも無くその夜の事を告げしかば、夏楊は聞きつつ感心して、「今に始めぬ事ながら、さしも御身の知恵深く、いみじく計らいたまいにけり。既にして悪僧は天罰その身に及ぶと云えども、遣水と二焼さえつつが無きこそ遺恨なれ。私は誓って彼の淫婦らを思いのままに斬りさいなんで、叔父の為、御身の為に早く余毒を除かずば、勇婦と云われる甲斐も無し。さわあらずや」と息巻けども、余所へはばかりる忍び声、鬱憤やるかた無かりけり。

その時岩飛葉はしきりに逸る夏楊を押し止め、さて云う様、  
「御身の遺恨は道理なれども、密通は男女諸共に討ち果たすにあらざれば、その不義の証拠無し。此の故に先頃、私が御身に囁き示せし計らいを仕損じて、返って彼の淫婦にたばかられ、私を追い遣りたまひしかば、私は遂に止む事を得ず、彼の悪僧らを討ち留めたり。しかるを今、又、遣水を討ち果たしたまわれれば、何をもて彼の女の不義の証拠にすべけんや。畢竟乱心※の沙汰に落ち、本妻に異ならぬ叔父の側女を殺したるその罪は逃れ難かるべし。よくよく思案したまえ」と云うを夏楊は聞きながら、

「しかりとも遣水めは許し難き悪人なり。よしや私がこの儀によって罪ならぬ罪に身を失うとも、親子に等しき叔父の為に彼の毒悪を除かで止まんや。既に覚悟を極めたり。留めたまは恨みにこそ」と息巻き猛く、あくまでに思い定めし有様なれば岩飛葉も遂に諫めかねて、

「しからんには是非に及ばず。さればとて逸らば事を仕損ずべし。ついて一つの謀り事あり。上手く彼の女をおびき出し、思いのままに罪を責めて、討ち果たしたまえかし。その謀り事は斯様斯様」と耳を引き寄せ説き示すを夏楊は聞きつつ頷いて、

「云われる趣は我が意に叶えり。しからばと云わん、かくせん☆」と示し合わせて立ち別れ、持井の宿所へ帰りけり。

※畢竟(ひっきょう)：究極。絶対。最終。(副)結局。要するに。 ※乱心(らんしん)：心が乱れること。気が狂うこと。

かくてその次の日に夏楊は遣水に云う様、  
「近頃鳥捕山の岨くえて、古き石の観世音が現れいでたまひしを、木こり、草刈りらが見い出して、ささやかなる御堂を設え、そこに安置し奉りしに、祈れば必ず利益あり。ここをもて遠近人が聞き伝え云い継いで、詣る者が日毎日毎に少なからずと聞こえたり。などて詣りたまわざる」と云われて遣水は

「然ればとよ。私も彼の御仏が流行らせたまう事はしも予ねてより聞きながら、旦那は日毎に▼療治の為にいで歩きたまうにより、今に遊山の暇もはべらず。さばれ此の頃は何となく疝起こって気を塞ぎ、悩ましき折が多ければ、保養の為に旦那に願って参詣せばやと思いはべり。なれども山路の事なれば非常の事も計り難かり。いかでか後ろ見になりぬべき良き道連れのあれかしや」と云うに夏楊は頷いて、

「私もせめて一度は参らんとこそ思うなれ。幸い明日は非番なり。詣りたまえば同道すべし」と云うに遣水は喜んで、

「男勝りの御身と共に参りはべらば、深山路も後ろ安くはべりてん」、さはとてやがて常庵にしか

じかと告げて、その夕べより割り籠わりごなどの用意をしけり。

常庵じょうあんは何事も遣水やりみずの意に違ちがう事無く、彼女がまにまにものせしかば、その日は病家に赴びょうかかずおもむに宿所しゆくしょに在あって留守せんとして、乗り物の事なども予かねて二挺にいていと誂あつらえしを夏楊なつやぎは酔えう癖くせあって、私わらわは徒歩より行かんとして、その明けの朝あの未まだきより供にには二焼にやき一人具ひとりし、遣水やりみずを駕籠かごに乗のせて、夏楊なつやぎと共に主従五人しゅじゅういつたり、鳥捕山とりとりさんを指さして行く程ほどに、既ふもとにして麓ふもとまで来きにけり。山路さんろは岨道そぼみちが多おほかれば、乗り物は危あやうしとて遣水やりみずを駕籠かごより出でして、二人の駕籠かごかきには乗り物をよく守まもれとて、そのまま残のこし留とどめて夏楊なつやぎは先まに立たって、遣水やりみず、二焼にやきと共に三人で山深く分け入いるに、予かねて謀はかりし事ことなれば人の通とほわぬ谷岨たにがけづた伝たいに行く事こと遙はるかかなりければ、遣水やりみずようやくいぶかって、

「彼の観世音かんのんへは絶たえ間ま無く詣までる人が在ありと聞きしに、会あわぬのはいかにぞや。道踏みちふみ違ちがえたるにやあらん」と云いう言葉ことばが未まだ終はらず、たちまち向むかいの木影きかげより咳せききしついで来きる者ものあり。是これすなわち別人べにんならず命いのち不知しらず岩飛葉いわひばなり。腰こしに一振ひとりの短刀たんとうを横よこたえて手に風呂敷包ふうりょ敷みを引ひき下くだげて、足早あしはやに近づちかづき来きて夏楊なつやぎらを見みて微笑えいごんで、

「此こは姉御あねごたち、観音かんのんにや詣まりたまうか」と云いうに夏楊なつやぎは立たち止とどまり、さらぬ様さまにて挨拶あいさつす。遣水やりみずは思おもわずも岩飛葉いわひばに会あいけるを心良こころよからず思おもうにぞ、言葉ことば少なにつつが無なき喜よろこびを述のべて立たち別わかれて走はり去いらんとしけるを夏楊なつやぎは急いそぎに引ひき止とどめて、

「やよ待まちね。遣水やりみず、そなたは去いぬる日ひに岩飛葉いわひば殿どのがひたすら叔父御おじごに据よえ膳ぜんして、本妻ほんつまにならまく欲ほすと真ましやかに云いいけるが、此この所ところにて今いま一度いちど、先まの如ごとくに云いいねかし。さあさあ」と急いそがせば遣水やりみずは困こまじ果はてて、▼「早過はやぎ去いりし雑談ざつだんを何なににかすべき」と云いわせもあえず、夏楊なつやぎは眼まなこを怒おこらし、

「此この淫婦いんぶめが猛たけ々たけしさよ。汝なんじは波海はかいと密通みつうしてしばしば忍しのび逢あいながら、返かえって我が姉岩飛葉いわひば殿どのに不義ふぎありと云いいしはいかにぞや。それのみならず我が叔父おじを毒害どくがいせんと目論見もくろみたる彼の悪僧あくそうとの密談みつだんをその折せに立たち聞きしたる証人しやうにんはここに在あり。とても逃のがれぬ天あまの責せきめ、白状はくじやうせよ」と左右さうぶより岩飛葉いわひば諸共しよご詰つめ寄よせて、「いかに、いかに」と責せきめ問とえども、遣水やりみずはなお争まりて「その事こと無し」と陳ちんずれば夏楊なつやぎはいよいよ怒おこって、後辺あとへについて密ひそかに恐おそれる二焼にやきの襟えり髪がみかい掴つかみ、予かねて用意よういの短刀たんとうを

懐ふところより取とり出だして、きらりと抜ぬいて目先めさきへ突つき付つけ、

「此この女めめも大胆だたんなり。汝なんじは牟残むざんと密通みつうして、遣水やりみずの悪事あくじを助たすけしその事は波海はかい、牟残むざんの最後さいごの白状はくじやうによって現あられたり。姉御あねご、証しやう拠こを見みせたまえ」と云いえば岩飛葉いわひばは心得こころえて、風呂敷包ふうりょ敷みを引ひき解とき、波海はかい、牟残むざんの衣ころもと絹きぬを遣水やりみず、二焼にやきに突つき付つけて、

「知らずや、去いぬる夜よに悪僧あくそうどもが汝なんじらに別わかれて帰かえる折せ、我われは彼奴かやつらを討うち果はたし、証しやう拠こに衣類いらいを納いれ置おきたり。かくても未まだ白状はくじやうせずや」と罵ののり責せきめたる勢いきいに二焼にやきはいよいよわななき恐おそれて、遂すなはち主従しゅじゅうの密通みつうの事ことの趣おもむきを斯か様やう斯か様やうとつぶさに白状はくじやうしてければ、夏楊なつやぎは「さもこそ」とて袂たもとの内うちより用意よういの繩なわを手早てはやく出だして岩飛葉いわひばに渡わたせば、岩飛葉いわひばは心得こころえて二焼にやきを厳いましく縛くめつつ松まつの梢こずえに吊かり上あげて、

「汝なんじはそこにて見物けんぶつせよ」とうち戯あそんで、夏楊なつやぎと共に刃やいばを抜ぬきそばめ、右左みぎひだりより遣水やりみずの胸むねに切きっ先さきを突つき付つけて、

「二焼にやきが既に白状はくじやうしたれば、とても逃のがれる道みちは無なし。さあさあ云いえ」と厳いましく呵責かせきに遣水やりみずはたくましかりし膽い魂たまも消きえ果はてて、齒はの根ねも合あわぬ声こゑを震ふるわし、

「私<sup>わらわ</sup>は心の迷いによって、恩を忘れて密夫<sup>みそかお</sup>を引き入れたりし不義悪戯<sup>ふぎいたずら</sup>は二焼<sup>にやき</sup>の白状<sup>はくじょう</sup>に違<sup>たが</sup>う事無し。許<sup>がた</sup>され難<sup>つみが</sup>き罪咎<sup>みつぶ</sup>なれども密夫<sup>みそかお</sup>は既に討<sup>きゅうあく</sup>たれしかば、旧悪<sup>きゅうあく</sup>（時効）※にこそはべるなれ。哀<sup>あはれ</sup>れ菩薩<sup>ぼさつ</sup>の御心<sup>みこころ</sup>にて命<sup>いのち</sup>を助けたまいね」と此方<sup>こなた</sup>彼方<sup>かなた</sup>へ手を合わせ口説<sup>くつげ</sup>くを夏楊<sup>なつやぎ</sup>あざ笑い、  
「不義悪戯<sup>ふぎいたずら</sup>の咎<sup>とが</sup>のみならばなお許<sup>ゆる</sup>される事もあらんを一方<sup>ひとかた</sup>ならぬ恩<sup>おん</sup>に背<sup>そむ</sup>いて主<sup>ま</sup>を毒害<sup>どくがい</sup>せんと謀<sup>ま</sup>りしは五逆<sup>ごぎやく</sup>※の罪人<sup>ざいじん</sup>なり。この世<sup>よ</sup>の暇<sup>いとま</sup>を取<sup>と</sup>らすべし。姉御<sup>あねご</sup>、二焼<sup>にやき</sup>を頼<sup>たの</sup>み参<sup>ま</sup>らす、さあさあ」と急<sup>いそ</sup>がして、逃<sup>にげ</sup>げんとしたる遣水<sup>やりみず</sup>の細首<sup>ほそくび</sup>、丁<sup>ちよう</sup>と討<sup>う</sup>ち落<sup>お</sup>とせば、岩飛葉<sup>いわひば</sup>も又、刃<sup>やいば</sup>を上げ、吊<sup>た</sup>り繩<sup>なわ</sup>はたと斬<sup>き</sup>り落<sup>お</sup>とし、だうと落<sup>お</sup>ちたる二焼<sup>にやき</sup>の頭<sup>こうべ</sup>を討<sup>う</sup>ち落<sup>お</sup>としたる双方<sup>しゆれん</sup>の手練<sup>てねん</sup>に愚<sup>おろ</sup>か無<sup>な</sup>かりけり。

※旧悪（きゅうあく）：①前に犯した悪事。②江戸時代の時効。 ※五逆（ごぎやく）：主君・父・母・祖父・祖母を殺す罪。

かかる所に一人の女が先より様子をうかがいけん。木陰<sup>きかげ</sup>をやをら立<sup>た</sup>ち出<sup>で</sup>て、手拭<sup>てふき</sup>いをもて此方<sup>こなた</sup>彼方<sup>かなた</sup>の刃<sup>やいば</sup>の血潮<sup>ちしお</sup>を拭<sup>ぬ</sup>いけり。その時<sup>とき</sup>夏楊<sup>なつやぎ</sup>は驚<sup>おど</sup>きながら眼<sup>まなこ</sup>を定<sup>ま</sup>めて、その女<sup>おんな</sup>をつらつら見るに、彼女<sup>かのんな</sup>は手長<sup>てなが</sup>蛭<sup>へび</sup>の早潮<sup>はやしお</sup>と呼ばれたる女<sup>おんな</sup>の手品<sup>てづま</sup>使いなり。年頃<sup>としがら</sup>▼その技<sup>わざ</sup>をもて奈良<sup>なら</sup>、五条<sup>ごじょう</sup>、多武之峯<sup>たふのみね</sup>なんどをうち巡<sup>めぐ</sup>って、世<sup>よ</sup>を渡<sup>わた</sup>る者<sup>もの</sup>なりければ、鳥捕<sup>とりとら</sup>へも折<sup>なつやぎ</sup>々<sup>々</sup>来<sup>き</sup>て、夏楊<sup>なつやぎ</sup>らにも知<sup>し</sup>られし者<sup>もの</sup>なり。

その時<sup>とき</sup>夏楊<sup>なつやぎ</sup>はちっとも騒<sup>さわ</sup>ぐ気色<sup>けしき</sup>無く、  
「珍<sup>てながえび</sup>しや手長<sup>てながえび</sup>蛭<sup>へび</sup>。かかる深山<sup>みやま</sup>に何事<sup>なにこと</sup>あつて一人<sup>ひとり</sup>徘徊<sup>はいかい</sup>したるぞや」と問<sup>と</sup>えば早潮<sup>はやしお</sup>は微笑<sup>わいご</sup>んで、  
「私<sup>わらわ</sup>は近頃<sup>なりわい</sup>仕合<sup>なりあ</sup>わせ悪<sup>わる</sup>くて生業<sup>なりわい</sup>のたつき無<sup>な</sup>きにより、此<sup>こ</sup>の山<sup>やま</sup>にて流行<sup>はやり</sup>らせたま<sup>ま</sup>う観世音<sup>くわんぜおん</sup>を心<sup>こころ</sup>あてに、例<sup>れい</sup>の手品<sup>てづま</sup>に人<sup>ひと</sup>寄<sup>よ</sup>せして銭儲<sup>ぜにぞろ</sup>けをせばやとて、さて来<sup>き</sup>て見<sup>み</sup>たれば聞<sup>き</sup>しに似<sup>に</sup>ず、根<sup>ね</sup>が山<sup>やま</sup>中の事<sup>こと</sup>なれば詣<sup>よ</sup>れる人は稀<sup>まれ</sup>にして生業<sup>なりわい</sup>になるべくもあらず。詮<sup>せん</sup>方<sup>かた</sup>無<sup>な</sup>きに自然<sup>じねん</sup>薯<sup>じよ</sup>でも掘<sup>ほ</sup>って売<sup>う</sup>らんと思<sup>おも</sup>いつつ、先<sup>ま</sup>より彼<sup>か</sup>処<sup>こ</sup>に在<sup>あ</sup>りしかば、凶<sup>おん</sup>らず御身<sup>おんみ</sup>ら二方<sup>ふたがた</sup>が叔父<sup>おじ</sup>御<sup>ご</sup>の為<sup>ため</sup>に不義<sup>ふぎ</sup>の側女<sup>そばめ</sup>を討<sup>う</sup>ち果<sup>は</sup>たしたまいぬる事<sup>こと</sup>の元末<sup>もとすえ</sup>の一部<sup>いちぶ</sup>始<sup>はじめ</sup>終<sup>しゆう</sup>を立<sup>た</sup>ち聞<sup>き</sup>きしつ、深<sup>ふか</sup>く感<sup>か</sup>じて漫<sup>まん</sup>ろにここへいでたるなり」と云<sup>い</sup>うに夏楊<sup>なつやぎ</sup>は頷<sup>うなず</sup>いて、岩飛葉<sup>いわひば</sup>にしかじかと告<sup>はやしお</sup>げて早潮<sup>はやしお</sup>を引き会<sup>あ</sup>わせ、又、早潮<sup>はやしお</sup>には岩飛葉<sup>いわひば</sup>の義勇<sup>おもむき</sup>の趣<sup>おもむき</sup>、義<sup>ぎ</sup>を結<sup>むす</sup>びて姉妹<sup>あねい</sup>となりし事<sup>こと</sup>までもつまびらかに説<sup>と</sup>き示<sup>し</sup>し、かく討<sup>う</sup>ち果<sup>は</sup>たせし遣水<sup>やりみず</sup>、二焼<sup>にやき</sup>はその罪<sup>つみ</sup>軽<sup>かろ</sup>きにあらねども、その密夫<sup>みそかお</sup>の波海<sup>はかい</sup>、牟<sup>む</sup>残<sup>ざん</sup>を先<sup>ま</sup>立<sup>た</sup>って討<sup>う</sup>ち留<sup>とど</sup>めれば今<sup>いま</sup>はその証<sup>あかし</sup>拠<sup>た</sup>無<sup>な</sup>し。これにより我<sup>われ</sup>々は予<sup>よ</sup>ねてより思<sup>おも</sup>案<sup>あん</sup>を定<sup>ま</sup>めて影<sup>かげ</sup>を隠<sup>かく</sup>さんと思<sup>おも</sup>うなり。かかれば再<sup>また</sup>会<sup>あ</sup>いは計<sup>はかり</sup>り難<sup>がた</sup>い別<sup>わか</sup>れにこそなりたり」と云<sup>い</sup>うを早潮<sup>はやしお</sup>聞<sup>き</sup>きながら、

「しからんには私<sup>わらわ</sup>をも伴<sup>たきょう</sup>いてたまわれかし。御<sup>ご</sup>二方<sup>ふたがた</sup>の荷物<sup>にもの</sup>を担<sup>た</sup>ぎ他郷<sup>たきょう</sup>に至<sup>いた</sup>れば、仕合<sup>なりあ</sup>わせの直<sup>ちよく</sup>る事<sup>こと</sup>もあるべからん。この儀<sup>ぎ</sup>を受け引<sup>ひ</sup>きたまいね」と又、他事<sup>たじ</sup>も無<sup>な</sup>く請<sup>こらべ</sup>い求<sup>もと</sup>めるを夏楊<sup>なつやぎ</sup>聞<sup>き</sup>かず頭<sup>こらべ</sup>を振<sup>ふ</sup>って、

「そは否<sup>いな</sup>むべき事<sup>こと</sup>ならねども、我<sup>われ</sup>々は罪<sup>つみ</sup>ならぬ罪<sup>つみ</sup>に浮世<sup>うきよ</sup>を忍<sup>しの</sup>ぶ者<sup>もの</sup>なり。今<sup>いま</sup>更<sup>さら</sup>落<sup>お</sup>ち着<sup>ちか</sup>く所<sup>ところ</sup>も定<sup>ま</sup>めぬ旅<sup>たび</sup>にしあれば伴<sup>とも</sup>い難<sup>がた</sup>し」と云<sup>い</sup>うを岩飛葉<sup>いわひば</sup>は押<sup>お</sup>し止<sup>とど</sup>め、

「さな宣<sup>のたま</sup>いそ。予<sup>よ</sup>ねてより私<sup>わらわ</sup>は行<sup>ゆく</sup>方を定<sup>ま</sup>めたり。我<sup>われ</sup>々が身<sup>み</sup>を寄<sup>よ</sup>せて憂<sup>うれ</sup>いあらじと思<sup>おも</sup>う所<sup>ところ</sup>は江鎮泊<sup>こうちんぱく</sup>にます方<sup>か</sup>無<sup>な</sup>し。去<sup>い</sup>ぬる頃<sup>か</sup>彼の<sup>か</sup>砦<sup>とりで</sup>の夏女<sup>なつめ</sup>、山桃<sup>やまもも</sup>と云<sup>い</sup>う二人<sup>ふたり</sup>の勇婦<sup>ゆうふ</sup>に会<sup>あ</sup>いし時<sup>とき</sup>、必<sup>かならず</sup>ず参<sup>ま</sup>って三世姫<sup>さんせいめ</sup>に仕<sup>つか</sup>えよと云<sup>い</sup>われたり。御身<sup>おんみ</sup>も知<sup>し</sup>って御座<sup>おわ</sup>すべし。暈砂利<sup>うんざり</sup>婆<sup>ば</sup>の事<sup>こと</sup>ありし時<sup>とき</sup>、手打<sup>てうち</sup>蕎麦屋<sup>そばや</sup>に酒飲<sup>さけのみ</sup>み居<sup>い</sup>たる二人<sup>ふたり</sup>の女<sup>おんな</sup>は世<sup>よ</sup>に聞<sup>き</sup>こえし、彼の<sup>か</sup>夏女<sup>なつめ</sup>と山桃<sup>やまもも</sup>なりき。云<sup>い</sup>わんや又、彼の<sup>か</sup>砦<sup>とりで</sup>の総司<sup>そうつかさ</sup>の小蝶<sup>せうてつ</sup>、大箱<sup>おほひら</sup>二人<sup>ふたり</sup>の刀自<sup>たうじ</sup>はおよそ一芸<sup>いちげ</sup>ある者<sup>もの</sup>を用<sup>もち</sup>いざる事<sup>こと</sup>無<sup>な</sup>しと聞<sup>き</sup>きぬ。しかるに此<sup>こ</sup>の早潮<sup>はやしお</sup>女<sup>によう</sup>郎<sup>らう</sup>は手品<sup>てづま</sup>に妙<sup>まう</sup>を得<sup>え</sup>たらんには必<sup>かならず</sup>ず用<sup>もち</sup>いらるべきに。伴<sup>とも</sup>いたまえ」とすすめるを聞<sup>き</sup>きつつ喜<sup>よろこ</sup>ぶ早潮<sup>はやしお</sup>は更<sup>さら</sup>なり夏楊<sup>なつやぎ</sup>も又、喜<sup>よろこ</sup>んで、遂<sup>つい</sup>にその儀<sup>ぎ</sup>に任<sup>まか</sup>しつ、予<sup>よ</sup>て用<sup>もち</sup>意<sup>い</sup>の書<sup>か</sup>き置<sup>お</sup>きを死骸<sup>しがい</sup>の辺<sup>へ</sup>に残<sup>のこ</sup>し置<sup>お</sup>き、三人<sup>さんにん</sup>は小道<sup>せうだう</sup>をうち巡<sup>めぐ</sup>り鳥捕<sup>とりとら</sup>山<sup>さん</sup>を下<sup>くだ</sup>りつつ、その夜<sup>よ</sup>もよすがら道<sup>みち</sup>を走<sup>は</sup>って姿<sup>すがた</sup>をやつし笠<sup>かさ</sup>深く、短刀<sup>たんたう</sup>は竹<sup>たけ</sup>に仕<sup>つか</sup>込んでこれを杖<sup>つゑ</sup>と

し突き立てて、近江路指して急ぎけり。

さる程に駕籠の者らは麓に待つ事久しけれども夏楊、遣水らが帰り来ず、いといぶかしく思う程に山より帰る木こりらの噂によって、谷陰に二人の女が殺されたる死骸ある由を伝え聞き、心いよいよ安からねば、諸共に山に登ってあちこちと尋ねるに、その死骸は遣水と二焼にて、夏楊は影も無く一通の書き置きのみがありしかば、いよいよ驚きいぶかって、その書き置きを携えて、持井の宿所に帰り来て、その事の趣を常庵に告げ知らせて件の書き置きを渡すにぞ、常庵はひどく驚き騒いでその一通を開き見るに、遣水、二焼らを殺せしは夏楊と岩飛葉の業なる事、且つ遣水らが不義密通の趣も大方は知られしかども半ばは信じ半ばは疑い、まず鳥捕山に赴いて事の体たらくを見んと議するに、日は暮れて初更(戌の刻)も過ぎたれば、夜の山路は危うしとてその明けの朝未だきより、その駕籠かき兩人と里人らをも狩り催おして山深く上って見るに、遣水と二焼の亡骸は昨夜狼に食われしと覚しくて、裂き千切れたる着る物と二人の髻の毛のみありけるを携え帰って由を国守に訴えけり。

よって有司(役人)は受けたまわり、彼の書き置きをも実見しつつ遣水の事の虚実を常庵に問いただすに、常庵は遣水らが不義密通ありし由はいささかもかくはべらずと云う。しからばこの夏楊の書き置きも胡論なり。もし夏楊と岩飛葉が遣水、波海らに恨みあって、あちこちにて斬り殺し、その罪を逃れん為に不義密通にかこつけて、此の書き置きを残したるか、これも又、知るべからず。早く夏楊、岩飛葉を追い捕らえて詮索すべしと決断あり。

これにより、俄かに領分の村里へ下知を伝えて追捕の事を命ぜられ、その後鎌倉の執権へ事の趣を聞こえ上げしかば、更にまた鎌倉より国々へ触れ知らして、その夏楊、岩飛葉を絡め捕るべしと下知せられける。さる程に夏楊、岩飛葉、早潮らは明日に出ては夕べに宿り、しきりに道を急ぎしかば近江路近くなりけり。

その時岩飛葉が云う様、

「賤の砦へ赴くには粟津或いは唐崎の渡りより船にて渡せば早けれども、都より下知せられて船をいださずと聞こえたり。又、佐波山道には新関あって容易く至り難しとぞ。されば美濃路より余吾にいれば、そこらの憂いがあらざる由は聞いたる事があるなれば、遠くとも美濃路に至ってその砦に赴くべし」と云うに夏楊も早潮も「しかるべし」と答えつつ、わざと美濃路へ赴きけり。

かくてその夜は美濃の国の祝の庄の枝村に字名を鈴振と呼ばれたる百姓の家に宿りを求めしに、旅籠屋にあらざれば、木賃の定めにて米を買い取り、借りたる鍋を囲炉裏に掛けて、手づから粥を炊かんとす。その時岩飛葉らは頭を巡らし、この家の体たらくを見るに、壁には弓矢、突棒、刺などなどを掛け渡し、棚には大きな法螺貝あり。三人はこれをいぶかって宿の主人に尋ねるに、主人答えて、

「此の所は江鎮泊へ遠からず、これにより彼の砦の賊婦らが押し寄せ来る事もあらんかとて、此の庄を領したまう祝部殿より下知せられ、もしさる事のあらんには法螺を鳴らし人を集えて討ち取るべしと触れられて、これらの武具を渡されたり」と、いと誇り顔に説き示すを三人は聞いて笑いつつ、この家には鶏が多かるに卵あればちとばかり売り与えたまいね」と云うに主人は頭を振って、「鶏は時を告げ、犬は忍びの者を知らせる軍陣第一のものなれば、祝部殿より触れられて卵だも売る事を許されず。しかるを何でに売るべきや」とつれ無く答えて奥に入りぬ。かくて早潮は外の方

へいでけるが、鶏の卵を五ツばかりたもと袂より取り出して、  
「これ見たまえ、才覚さいかくしてこの名玉めいぎよくを取り得たり」と誇るを岩飛葉いわひばらは見返って、  
「今宵は寒きにいざさらば卵たまご雑炊ぞうすいして温まらん」と云うに早潮はやしおは心得て、その卵を打ち砕き鍋に入  
れ味噌と共にかき混ぜて、時の間に雑炊を炊きおろし、皆諸共に食うべけり。

その時主人あるじは再び来て、打ち砕きたる卵の殻を見出して驚き怒り、盗まれたりと推せしかば濁声だみこえ高  
くがやがやと三人の勇婦ゆうふを罵ののしりけり。

是より不慮の戦い起こるその事の趣おもむきはつぶさに下帙かちつに著すべし。

傾城水滸伝 第十編ノ三 曲亭馬琴著 歌川国安画

主人あるじは怒りののし罵ののしって、

「太平の世に汝なんじらは盗みしながら猛々たけたけしく争い挑む不敵いずこさよ。ここを何処はふりと思うらん。祝の庄と  
て隠れも無き大刀自殿おおとじの領分なうしなるぞ。悪く騒がば今更に女なりとて用捨ようしゃはせず。思うに必ず汝なんじらは  
江鎮泊こうちんぱくの賊婦ぞくふにて、ここらをうかがう忍びの曲者くせもの。日頃の手癖てくせが止まずして良からぬ業わざを為すにや  
あらん。しからんには一人も許さず皆縛いましめて、祝の殿の御館みたちへ引かん。覚悟かくごをせよ」と息巻たけき猛く  
気負いいかかれど、岩飛葉いわひばはひるまず声を振り立てて、

「あな物々しき盗人ぬすびと呼ばわり。高の知れたる鶏の卵を捕るとても、その値あたを償つぐなえば何の咎とがやある。  
さるを汝なんじが邪推じゃすいにて世に我々を賤しずの砦とりでの勇婦ゆうふと云うこそ可笑かしこしけれ。例え彼処いの勇婦ゆうふなりとも汝  
らが分際わがにてならば手柄てがらにからめて見よ」と争う負けじ魂なつやぎに夏楊はやしおも又、早潮はやしおも引くに引かれぬ諸口論もろくちろん  
は、ことわざあるじに云う売り言葉あるじに買い言葉あるじにて果てし無き。

主人あるじはいよいよせき立って、

「とでもかくても汝なんじらは許し難がたき盗人ぬすびとなり。望みに任して御館みたちへ引かん。さあさあ立ちね」と噛み  
付く如く罵ののしり猛たけって、岩飛葉いわひばの小腕こかいなむずと取り縛り、引き立てんとしてければ、岩飛葉いわひばは怒りに絶  
えずして足をすくって二三間もどりを打たして投げたりける。

主人あるじはひどく投げ飛ばされて、起きも上がらず苦しげに、

「やよ人殺し。盗人女ぬすびとを捕らえよ」といとも激しく呼び立てれば、家の内の者は更あたなり辺りに近き  
百姓どもも事有りけりと驚き騒いで手に手に棒を脇挟み、またたく隙ひまに馳せ集うその人およそ二三  
十人。皆遅れじと込み入いって、岩飛葉いわひば、夏楊なつやぎ、早潮はやしおらを打ち倒さんとして競みいかかれど、三人の勇婦みたり  
ちっともひるまず、仕込み杖つえを引き抜いて先に進みし土民つえらを打ちなびき斬り払い、早二三人斬り  
倒いつたりして五人に深手ふかを負わしたり。

かかる手並みに辟易へきえきしたる百姓どもは立つ足も無く、おらおらはと逃げたりける。いざこの隙ひま  
と岩飛葉いわひばらは身をこしらえしつ、甲斐甲斐としく外の方指して馳せいずれば、しきりに鳴らす法螺貝ほらがの  
音に寄せ来る地方ところの雑兵ざっぴやうは百姓どももうち混じり、早くも行く手を断ち切って絡め捕らんと轟ひし  
めいたり。その時岩飛葉いわひば、夏楊なつやぎ、早潮はやしおは手に手に引き抜く仕込み杖つえの氷の刃をきらめかし、且つ戦い  
且つ走り、僅わずかに道を斬り開き、とかくして里外れの荒野あらのの辺ほとりを過ぎる程に又、一群れの雑兵ざっぴやう  
百姓ひやくしやうが向かいより押し寄せ来て、後にも近づく寄せ手の大勢が早差し挟んで攻めれども、岩飛葉いわひばら

は物ともせず、近づくと敵を斬り伏せ斬り伏せ道を求めて走る程に、既に行く手の草むら陰に引きたる縄を知らざりける。

早潮はこの鍵縄にたちまち足を絡まれて、思わず「だう」と伏し転ぶを追っ手の雑兵が折り重なって押さえて厳しく縛めたり。夏楊はこれを見返って救わんとしてけるを又、鍵縄に掛けられて、既に危うく見えしかば岩飛葉すかさず刃をもてその縄を切り払い、両人手繁く戦って遂に虎口を逃れけり。

○かくて岩飛葉、夏楊は世にまぎれ後を埋ずめてひたすらに走る程に、既にして夜は明けたり。道一二里に及びし頃にも追い来る者が無かりしかばしばらく息を付かんとて、と見れば道の片辺に酒と飯を売る店あって早くも竈を焚きて居り。かくて岩飛葉、夏楊はひとしくここに立ち寄って床机に尻をうち掛けつつ、しばらく憩い居る程に主人は酒を温めてもて来つつすすめけり。

その時岩飛葉、夏楊らは早潮を取り返さんとて忍びやかに語らうに、敵は大勢味方は小勢にていかにせましと額を病まして栓方も無く思う折から、下部を供に具したる女が店の辺を過ぎるあり。

夏楊は思わず見返るに予て相知る者なりければ彼方も早く見出して

「そは病葉の刀自ならずや。思い掛けず」とばかりに床机の辺に立ち寄って、絶えて久しき対面につつが無きをぞ祝しける。さても今、夏楊に招かれて、囚らずここに立ち寄りたる女は般若面の渡橋と云う者なり。先に大和の鳥捕に居り、里の女の予らに手跡の指南を業として、しばらくそこに在りけるが、思うにも似ず住みや侘びけん。借りたる家を主に返して行方も知れずなりたりき。この故に夏楊と予ねて知る者なるに、思わず巡り会いしかば互いに不審晴れやらす、その時夏楊は渡橋がこの地に在る事の由を尋ねるに渡橋答えて、

「私は予て知られし如く筆執る業が人並みなるに、いささか武芸を嗜むものから、先に大和に在りし程は心に叶わぬ事のみなれば、ちとの縁を心あてに遙々この地へ来にけるに、李村の領主なりける岩居殿に招かれて今は仕えて彼処に居り、今朝しも主の使いに立って只今宿所へ帰るなり。さても御身は何故にかくは旅寝をしたまうやらん」と問われて夏楊は

「然ればとよ。私の事は今更に一朝に説き尽くし難かり。その故は斯様斯様」と叔父の為にその側女の遺水を討ち果たしたる始め終わりを説き示し、岩飛葉を引き合わせ、さて又、昨夜は羽振村にて斯様斯様の事により宿の主人と思わずも物争いをしつるにより、加勢の者に取り囲まれて事の難儀に及びしをやや切り抜けて来たれども、手長蛇早潮と云う連れの方がその折絡め捕られしを取り返さんと欲すれども、謀り事を得ざるなり」と告げるに渡橋は頷いて、

「そは幸いなる事にこそはべれ。そもそも当郡には三人の領主あり。第一を祝部の大刀自の夜叉御前ととなえたり、此は祝部の小領武彦主の後室にて男勝りの武芸あり。且つ三人の息女あって、第一を雲の峯龍子となえ、次を山嵐の虎子と呼びなし、又、その次は月の輪の熊子これなり。およそこの三柱の息女たちの心様は親に勝って武芸を嗜みて力強かり。なかんづく熊姫は万夫不当の勇婦なり。次の領主は我が主君にて李野庄司理の後室なり。その名を岩居と呼ばれたまうが、心様が豪勇なれば世の人々があだ名して上不見鷲と呼びなしたり。さて又、その次の領主は胡沙の庄官定村の後室にて野作の刀自と呼ばれたまうが、男女二柱の子達あり。姉御前を丈夫乙女鳴子となえ、弟を青海原胡沙丸と呼びなしたり。いずれも武芸に疎からず、なかんづく胡沙丸主は力量はやわざ早業、牛若に優るとも劣るべくもあらずと聞こゆ。そもそもこの領主たちは当代全て女なれども、

武勇の聞こえあるにより都より直免あって当郡を治めたまう。さるにより祝部殿は祝の里に居城して、十五ヶ村を領したまう。私の主君は李村にあり、胡沙殿の垣揚城はすなわち胡沙村に在り。さればこの領主たちは代々互いに睦まじく、もし領分に事あれば相救わんと契りたまう仲にしあれば、我が主君の岩居殿より消息(手紙)して生け捕られたるその女中を請わせたまえば異議も無く返されん事疑い無し。私と共に李の里へ来たまえかし」と、まめやかに云われて喜ぶ夏楊、岩飛葉はうち連れ立ちつつ忙わしく、李の館へ赴きけり。

かくて渡橋はその身の部屋に夏楊と岩飛葉を留め置き、やがて岩居にしかじかと彼女らの事を告げ知らせ、祝の庄にて生け捕られたる彼の早潮を救わせたまえと密かに願ひ申すにぞ、岩居は心素直にて、▼且つ武勇ある婦人なれば、岩飛葉と夏楊らの事の由を伝え聞いて、捨て難き思いあり。それのみならずこの年頃、いとまめやかに仕えたる渡橋の願事を否と云はんはさすがにて、快く受け引きつ、やがて岩飛葉、夏楊を呼び寄せて対面しつつ事の由を尋ねるに、その云う所が渡橋の告げたる趣と異ならねば、すなわち家の子(家臣)何がしを祝の庄へ遣わして祝の大刀自に云わせる様、

「昨夜しかじかの事により、御領分の百姓どもに絡め捕られしその女は私が方へ来る者の道連れにて、怪しき者にははべらずかし。返させたまえ」と懇ろに頼み遣わしたりけるに、その者やがて帰り来て、

「仰られたる趣を祝部殿へ申し入れしに、返答にも及ばずして追い返されて候なり」と云うに岩居は眉をひそめて、

「そは心得ぬ事になん。年頃互いに云い合わたる契りを今更仇にして、かく情も無くもてなさるは汝の言葉が不束にて行き届かざる故なるべし。此の度は渡橋が走り行き、早潮とやらんを請い得て来よ。その口上は斯様斯様」と言葉せわしく云い付けて、手ずから書状を書きしたため、それをもたらし遣わしけり。

かくて二時余りを経て、渡橋は息付きあえず、祝の庄より帰り来て、さて岩居に告げる様、  
「私は祝部殿へ参って御遣いの由を申し入れしに、大刀自殿は対面したまわず、第三番目の息女の熊姫殿が腰元数多従えて立ち出て対面しつつ、御口上をばよくも聞かで御消息(手紙)を見る程に気色変わって声を振り立て、

「いかなれば、汝の主は江鎮泊の賊婦をあくまでに鼻肩して、筋無き事を云われるやらん。昨夜此方の領分の百姓どもが生け捕りたる悪たれ女は賤の砦の忍びの者に疑い無し。さるを今更偽り飾って救い取らんとせられるは取りも直さず謀反の同類。異議に及ばば許し難し。岩居諸共絡め捕り、都へ引かん。覚悟せよ」と噛みつく如く罵って、御消息をずたずたに引き裂いて捨てられたり。私もさすがに耐えかねて、云い争わんとはしつれども、熊姫いよいよ猛り狂って薙刀を脇挟み、早腰元らに目を配せ討ちも取るべき勢いなれば、犬死にせんは益無しと思ひ返しつ走り出て立ち帰ってこそはべるなれ」と告げるに岩居はひどく怒って、

「そは安からぬ事ぞかし。此の年頃の好を忘れた大刀自親子の無礼緩怠、私を侮ると覚えたり。その儀ならば用捨し難し。今より彼処へ押し寄せて、手並みの程を思い知らせん。皆、出陣の用意をせよ」といとも▼激しく下知しつつ、早小具足に身を固め、弓矢手鉞み乗りいだす、馬の前後に従うたるその勢およそ百五六十人。渡橋、岩飛葉、夏楊も皆ひしひしと身を固め、遅れじとのみ進



みけり。

さる程に祝の庄では祝部の大刀自、龍子、虎子、熊姫らが昨夜百姓どもが生け捕って差し出したる早潮を江鎮泊の賊婦と名付けて巖しく牢屋に繋がせしに、思い掛け無く李の領主の岩居より消息(手紙)して、彼の早潮を救わん為に使い再び及びしをあくまでに罵り懲らして追いつ返したるにより、岩居は怒りに耐えずして、「押し寄せ来ると聞こえしかば、さもこそあらめ」とあざ笑い、既に戦の手配りしつつ寄せ手遅しと待ち受けたり。

さる程に岩居は手勢を従えて祝の庄へ押し寄せ来て向かいをきつと見渡すに、橋を引き城門を閉ざして静まり返って音もせず、その時岩居は馬乗り進めて、

「祝部親子、さあいだよ。汝らは旅の女を由も無く生け捕らせて江鎮泊の賊婦と名付け、罪無き人を苦しめたる非法の振る舞い為すのみならず、あくまで私を罵って消息をさえ引き裂き捨てしはこれ狂人の業に似たり。事の理非を正さん為に岩居が自ら向かうたり。さあさあいだよ」と呼び張れば、猛雄の兵らがひとしく鬨の声をあげ、早埋め草を投げ入れ投げ入れ打ち破らんとする程に、大手の櫓をさっと開いて兵数多従えたる熊姫がまっ先に現れ出て、顔に似気無き声を振り立て、「愚かなり、李の岩居。汝は賤の砦の謀反人らに荷担して、味方討ちする人非人。天罰思い知らせんず」と云うより早く弓に矢番い、よっ引き固めてひゃうと射る。狙い違わず岩居の肩先を野深く丁と射たりしかば、岩居はしばしも耐えずして、馬より「だう」と落ちてけり。その時城の兵らは城門をさっと押し開き跳ね橋を投げ渡して、面も振らず斬っていでたる勢いの猛かるに、李の方は大将が深手を負いしに心臆れて戦わんとする者無く、岩居も既に危うかりしを岩飛葉、夏楊、渡橋らが踏み留まって防ぎ戦い、岩居を馬に助け乗せて李野庄へ引き返す、周章(あわてる)大方ならざりけり。

かくて岩居は城に帰って矢傷を療治させたりけるに、急所にはあらねども深手なれば今更に祝の城を攻むべくもあらず、返って敵に逆寄せられぬ用心の外に他事も無ければ▼岩飛葉と夏楊は深く望みを失って、かくてはとみに早潮を救い取る由も無し。江鎮泊の夏女に頼って本意を遂げんと談合しつつ、すなわち二人が思う由を渡橋に告げ、岩居に告げて身の暇を乞いしかば、岩居は今更留めかねて嘆息の他に術も無く、

「江鎮泊の勇婦らは朝敵なれば我が口づから彼処へ去ねとは云い難けれども、そは各々の自在なるべし。私は既に祝部と確執に及びしより、熊姫の矢に破られて手を負うたれば心に任せず、されば此の後祝部らを助けて戦をせんとは思わず、しかりとて賤の砦の勇婦に味方すべくもあらず。木にもつかず草にもつかで、しばらくかくてあらんのみ。此はいささかの物なれども路用にせられれば幸いならん」と答えて渡橋に云いつけて、金十両を贈りしかば、岩飛葉も夏楊も喜びを述べ別れを告げて、江鎮泊へぞ赴きける。

○かくて岩飛葉は夏楊と諸共に予て夏女に聞きたりける朱西の店に至ってしかじかと由を告げ、夏女に会わたく欲しき由を密かに頼み聞こえしかば、朱西は早く心得て、鎬矢を射て早船を招き寄せ、岩飛葉、夏楊をうち乗せて賤の砦へ遣わしけり。

その時夏女は出迎えて岩飛葉に對面し、さて夏楊にも名乗り合いつつ三世姫に仕えんと思うてここに來る由をつまびらかに聞き届け。且つこの二人の勇婦らが<sup>やまと</sup>大和を逐電したりける事の由を聞きながら小蝶、大箱に告げしかば、小蝶も對面すべしとて衆議廳に招き寄せて懇ろにもてなしけり。

その時岩飛葉、夏楊は去ぬる日祝村の旅宿にて連れの水早潮が鳥の卵を物せしより宿の主人と事いで来て、里人らに追い打ちせられ鍵繩に掛けられて、彼の早潮を生け捕られたるその事の始めより、般若面渡橋の事、李の領主上不見驚岩居の浅からぬ情けの趣、祝部の大刀自親子が江鎮泊を物ともせで罵り猛る体たらく、岩居は彼の日深手を負って早潮を取り返す便宜もあらずなりにたる事をつまびらかに告知らせて、

「願うはちとの戦を起こして彼の祝部を討ち滅ぼし、手長蛭早潮を救わせたまえば、この上の幸いならんと願うにぞ。」

小蝶はこれをうち聞きつつ気色変わって声を苛立て、

「者ども早くこの兩人に荒縄掛けて引き据えよ」といとも激しく下知するにぞ、岩飛葉、夏楊は驚いて、「我々は犯せる咎は無し」と云うを小蝶は聞きながら、

「何でふ罪が無しとは云わせん。汝らは心汚く、只喉口を貪って卵を盗み食らいしより、連れの水を生け捕られて江鎮泊の武名を落とせし真に鳥澁の痴れ者なり。もしこれをしも許し置かば、何をもてこの以後を懲らさん。頭を並べて刃を受けよ」と息巻き猛く責め罵って、早懐剣を抜かんとせしを大箱、呉竹はすがり止め、様々に諫めこしらえ、

「その憤りは道理なれども、彼の早潮とやらんこそが手長蛭のあだ名も虚しからず不正事をしたればとて、この二人の勇婦らまで汚れし行いをすべくもあらず。さるを遙々姫上の御味方にとて参れる者を怒りに任して失いたまえば、誰か又、此の後に味方に参る者あらんや。まげて許させたまいな」と言葉を尽くして諫めしかば、小蝶は僅かに怒りを収めてようやくに許しけり。

その時大箱は又、云う様、

「彼の祝部の大刀自▼親子は自らその身の武勇を頼み、常に此の江鎮泊を侮り罵ると聞こえたり。いでや今この折をもて、押し寄せて攻め滅ぼして味方の武勇を世に示さずば、臆しにけりと人も云うべし。私は不肖にはべれども、勇婦たちと諸共に祝の庄へ押し寄せて、雌雄を一時に決すべし」と云うに小蝶は喜んで、

「さらば手分けをしたまえ」とて、しばらく軍議を凝らしけり。

かくて小蝶は岩飛葉、夏楊を桜戸、味鴨ら、全て砦の勇婦らに引き合わせ、山桃の次と座席を定め、その身は呉竹、味鴨、二網、五井、七曲、薄衣、筒鳥らと共に賤の砦を守るべし」と各々手分けを定めけり。

○さる程に大箱は花的、琴樋、末広、カ寿、夏楊、岩飛葉、袖垣、黄葉、大鳥、山桃らを一陣の大將と定めて、桜戸、秦名、夏女、横鯛、下貝、涼風、飛子、腐鶏、白粉らを二陣の大將と定め、大箱自ら中軍の士卒を率いて姫上並びに小蝶らに別れを告げ、三千五百の軍勢を三手に分かちて進発す。その体たらくは整々として勇まざる者無かりけり。

されば又、総大將の大箱が祝の庄を相距る事はおよそ一里余りにして要害の地に陣を取り、さて桜戸らと議する様、

「胡沙、李野、祝部の三ヶの庄は民強くて土地肥えたり。世の風聞を伝え聞きしに、なかんづく祝部の大刀自は十五ヶ村を管領して、彼の娘に雲の峯龍子、山嵐の虎子、月輪の熊姫などと呼ばれたる男子勝りの勇婦あり。又、龍子らの武芸の師匠に金撮棒朧玉と呼びなされる万夫不当の女あり。只これのみにあらずして胡沙の庄の領主の野作の刀自女の二人の子どもは姉を健少女鳴子と名付

け、弟を胡沙田の胡沙丸と呼びなしたり。いずれも武勇の聞こえあり、艱難共に相救うと日頃聞いたる事あれば必ずしも侮るべからず。よってまず忍びの者を遣わして敵の虚実を探り極め、機に望み変にに応じて兵を進むべし」と云う言葉も終わらぬ程に、力寿は「得たり」と進み出て、「姉御、私を遣わしたまえ」と逸るを大箱は押し留め、

「そなたは萬に手荒くて性急なれば如何わせん。かかる事には使い難し」と云いつつ辺りを見返って、

「やよ山桃殿、岩飛葉殿。大儀ながらも云い合わして敵の様子を見て来たまえ。必ず生け捕られたまうな」と云うに二人は一議に及ばず等しくそこを退いて思い思いに姿をやつし、供をも具せず只二人にて祝の庄へぞ赴きける。

さる程に山桃と岩飛葉は各々手早く姿をやつすに、山桃は髻を縮ね(輪にする)で頭巾を被り、笠を頂き腰衣を身に付けて、手には木魚を打ち鳴らし尼法師が門に立って物を乞う如くにいでたちて、岩飛葉は又、去ぬる頃大和にてしたる糸針を売る▼女にいでたちて風呂敷に包みたる箱を背負い、脚絆を履いて裳裾を高く壺折りしつつ祝の庄へ赴く程に兩人密かに談合する様、

「かくの如くうち連れ立って歩かば人に怪しめられん。立ち別れ道を変え、敵の様子をうかがわん」とてそこより東西に引き別れ、巷を指してぞ進みける。

※縮ねる(わがねる): わが(たが)ねて輪にする。

○されば又、岩飛葉は「糸よ、針よ」と呼び張って行く事およそ一里ばかり。と見れば道の方辺に豆腐を商う草の屋あり。主人の母にや一人の婆が岩飛葉を呼び入れて木綿針を買いつつ云う様、「御身はここらに見も慣れぬ女中にこそ御座するなれ。そも何処より来たまいたる」と問われて岩飛葉はさりげなく、

「真に推量せられる如く、私はこの地の者にはべらず。元は都の者なるが近頃夫は世を去りつ、ちとの縁を心あてに遙々この地へ来たれども、頼む木の下に雨漏って、その人も又、近き頃身罷りにきと聞こえしかば詮術無さの出商い。今日より売りにいではべり」と云うを真と聞きなしたるその婆は頷いて、

「さては何事も知らずや御座する。ここには戦始まって、明日は必ず合戦あらん。およそこの祝の庄には幾筋ともなく枝道あり。不知案内の人たちは道に迷って出処を失い迷惑する者常にあり。かかれば御身も必ず迷って、軍兵たちに切り倒さる事もしあればいかがわせん。笑止の事や」と囁くを岩飛葉は聞きつつ驚いて、

「そは思い掛けも無き厄難にこそはべるなれ。願うは道を教えてたべ。情けにこそ」と他事も無く頼めば婆は声をひそめて、

「うかとは云わぬ事ながら、他郷の人と聞くからにいと痛ましさに告げるなり。見たまえ向かいの往還に大きな柳の木が幾らとも無く植えてあり。されば柳を葉にしてあの道筋に行く時はちっとも迷わで心ぎす方へ行く事いと易かり。もしあの柳を外に見て枝道に行く時は行く先々に難所あり。行けども行けども里へ出ず、進退そこに極まって詮方も無くはべるかし。されば歌にも「道の辺の柳の下に寄ってこそ、吹きかどわかす風に迷わじ」。やよなう合点が行きましたか」と告げるを喜ぶ岩飛葉は思わずも嘆息して、

「さる由ありと知らずして道に迷えば喧嘩の傍杖、打たれて命を失うべし。御身の情けは一言千金、此上無き慈悲ではべるかし」と云う端に主人の婆は窓の日陰を仰ぎ見て、

「今日も暮れるに程は無し。危うき夜道をせんよりはここに泊まって明日の朝、とくいで行きたまえかし。我が身はお世話婆と呼ばれてかすかなる世を渡れども、人悪ろかれとは思わぬなり。一人息子は軍役に借り取られ今宵は帰らず、参らす物とて糧飯のみではべれども言葉敵の無き宿なり。互いに憂さを慰めてん。やよ、なう草鞋を脱ぎたまえ」と世に頼もしき主人振りに岩飛葉はいよいよ喜んでやがてその意に任せけり。

しばらくして村のあるきが割竹の音いかめしく、「敵方の忍びの者が入りたらんも計り難し。各々用心したまえ」と呼び掛け、呼び掛け、駆けり行く。岩飛葉は安からぬ心を色にも表さず、お世話婆を見返って、

「今呼び張って行きたるは何事ではべるにや」と余所余所しげに尋ねるをお世話は聞いて、「然ればとよ、先にも云いし事ぞかし。江鎮泊の勇婦たちがここらへ押し寄せ来るにより、忍びの者の用心せよと触れて心を得さするなり。御身もここに泊まらずにあのまま出て行きたまえば、よしや道に迷わずとも怪しめられて生け捕られ、辛き目に会いたまいせん。うたて※の戦三昧や」と云う言葉が未だ終らず、先遂う声々いかめしく一群練り来る数多の兵。その中に大將は十六七なる女にて萌黄緘の鎧着て月毛の駒にうち乗りたる。まっ先には一人の女をいとも厳しく縛めて雑兵に引かせつつ城を指して帰り行くのを岩飛葉は物の陰より見れば、無惨や生け捕られたるその女は▼別人ならず我と等しく忍び入りたる山桃にてありければ、此はそもいかにとばかりに轟く胸を押し鎮め、彼の兵らをやり過ごしてお世話婆にうち向かい、

「只今ここを過ぎりたる大將は城方の息女にて御座わするか、その名を聞かまく欲けれ」と問われてお世話は声をひそめ、

「然ればとよ、あの大將は月の輪の熊姫とて、この領主の第三番目の息女にて御座するが、胡沙の庄の胡沙丸主と許婚ありと云えども未だ婚礼は遂げたまわす。見たまう如くあの姫上は御顔容が世に優れ、麗しきに似気も無く、力あくまで強くして心様も又猛かり。生け捕られしは敵方の忍びの者ではべるべし。彼の大柳を葉にする道を得知らず度を失い、絡め捕られし者にこそ」と云うに岩飛葉は頷くのみで一人心に思う様、

「……口惜しや。山桃はいづべき道を知らずして遂に虜になりたるならん。我追っかけて山桃を取り返さんと欲するとも、敵は大勢この身は一つ、救うに由も無きものなり。夜も明ければ立ち帰り、大箱の刀自にこれらの由を告げ知らせるにます事あらじ」と思い返しつ、まどろみもせぬその夜をここに明かしけり。

※うたて：事態や心情が意志に関係なく移り進んでしまうさま。①ますます。②嘆かわしい③情けない

○さる程に大箱は敵地の様子を見て来よとて、先に岩飛葉と山桃を遣わせしに、日は早西に傾けども彼女らが帰り来ざりしかば心の中は安からず、又、花間田の大鳥を祝の庄へ遣わせしに、しばらくして大鳥は喘ぎ喘いで帰り来て、さて大箱に告げる様、

「私は仰せに従って密かに彼処へ赴きしに、行く手行く手を切り塞いで外より来る者を通さず。且つ里人の噂を聞きしに、山桃は生け捕られて城中へ引かれしとぞ。岩飛葉はいかになりけん。その儀は聞きも得ざりき」と告げるに大箱はひどく怒って、

「さては山桃、岩飛葉は敵の虜になりけるよ。今より彼処へ押し寄せて短兵急に攻め破り、山桃、岩飛葉を救うべし。さあさあ」と苛立って、力寿、夏楊を先陣としてその身は花的、大鳥らを左右に従え、桜戸、秦名の勇婦らを後陣の大將として手分けを定め、しきりに馬を早めつつ祝の庄へ押し寄せけり。

かくて力寿、夏楊は三百余人を従えてまっ先に▼進みつつ祝の城へ寄する程に、道にして日は暮れけり。既に大手（門）に近づいて向かい遙かに見渡せば、跳ね橋を引きたるのみで城中は静まり返って寄せ手近づけども音もせず、力寿はしきりに苛立って攻め掛からんとしてけるを夏楊が急に押し止めて、

「事の様子を推するに敵には必ず謀り事あるべし。大箱の刀自が来たまうまで、まず待ちたまえ」と諫める程に大箱は花的、大鳥らと諸共に数多の軍兵を従えて早くも押し寄せ来にけるが、この有様を見て疑い晴れず心密かに後悔して、

「先に還沙路村の弁才天女が授けさせたまいし神書にも、敵を見て逸りなせそと在りしを漫ろにうち忘れ、深入りせしこそ誤りなれ。敵の謀り事に落ちぬ間にとく退け」と下知しつつ引き返さんとする程に、龍が岡の方に当たって一声の石火矢が響く程こそあれ、攻め太鼓を鳴らして鬨の声を上げ、矢を射かくる事雨の如し。その時力寿は龍が岡へ駆け向かわんとする程に、ここ彼処の森の内より数多の軍兵が現れ出て、前には龍子、虎子あり。後ろよりは熊姫、朧玉が諸軍を進めて、攻め付け攻め伏せ、「大箱を逃がすな」と声々に呼ばはりたる勢いは潮の湧く如く当たるべくもあらざれば、さしにも猛き江鎮泊の勇婦らもひとしく度を失って、只大崩れに崩れて道を求めてひたすらに退かんとしつれども、はや大石、大木をもて行く手を厳しく塞ぎたり。とかくして石を取り除き僅かに道を切り開き、ひたすらに走れども、怪しむべしその道筋を行けども行けども先へは得いえず、巡り巡って又、元の龍が岡へぞ戻りける。

これによって雑兵らはここ彼処にて射倒され斬り伏せられる者少なからず、▼大箱はますます後悔して、

「祝の庄には枝道多くて案内を知らざる者は常に迷うと聞いたるが、その事果たして違わざりけり。我はここにて討たるべし。止みなん、止みなん」と呟いて必死の覚悟を極めたり。しかれども相従う勇婦らは薄手を負ったる者も無く、皆大箱を守護しけり。その中に力寿はちっとも気を屈せず、彼の斧をもて近づく敵を叩き伏せ、つんざいて、「我に続け」と叫ぶになん、花的、夏楊、大鳥らも味方を励まし先に進んで夜すがら道を走れども、敵の囲みはいや増していづべき道は無かりけり。

傾城水滸伝 第十編ノ四 曲亭馬琴著 歌川国安画

さる程に大箱を始めとして諸軍は等しく追い詰められて栓方も無く思う折から末広の陣よりして「岩飛葉、帰り来れり」と告げしかば、大箱は斜めならず喜んで馬を止めて対面す。その時岩飛葉が云う様、

「私は斯様斯様の所にてこの地の様子を聞き得たり。全て大柳のある道を行けばいささかも迷う事無し。なおも詳しく探らん為にそこに宿って在りしかど、味方敗軍せし由を聞くと等しく逃れ出て

忍びてここまで来るなり。哀れむべし山桃は柳の事を知らざりけん。絡め捕られて引かれしをその折垣間見はべりき」と言葉せわしく告げ知らせるを大箱は聞きながら、或るいは喜び或るいは驚き、「今日の敗軍のみならず、早山桃を敵の為に生け捕られしこそ口惜しけれ。今はた止まん☆悔やむとも帰らず、皆大柳を目当てにして、さあ走りね」と下知するに諸軍はようやく標を得て、柳の並木を心当てに逃れ去らんとしつれども、敵はなおも慕い来て、おっとり込めて討たんとす。その時夏女、下貝らは大箱に申す様、

「此の大柳を葉にしても、なお又、敵に囲まれるは必ず故ある事なるべし。あれ見たまえ小山の上が高く掲げたる灯笼あり。味方が東へ行く時はあの灯笼を東へ振り、又、西へ行く時は西の方へ振り動かすは敵の合図に疑い無し。手立てをもって速やかに取り除くにあらざりせば、囲みを逃れ難かるべし」と云うに大箱は仰ぎ見て、

「真にあの灯笼は敵の合図にはべるべし。しかりともいかにして打ち消す事なるべしや」と云うを花的是聞きながら、

「そは為し難き事とも覚えぬ。いでいで」と云いながら馬に角☆入れ乗り進め、矢頃を計り、弓に矢番い、満月の如く引き固め、ヒヨウふっと切つて離せば、狙い違わず彼の灯笼をたちまち▼ハタと射落としけり。これを見てける味方の軍兵があつとばかりに感ずる声はしばしは鳴りも止まざりけり。これにぞ敵は合図を失い取り巻く由が無くなりければ、皆々始めて囲みを逃れて柳の並木を葉にしつつ元の陣所に来る頃には夜はほのほのと明けにけり。

○その時大箱は諸将の安否を尋ねるに一人黄葉が見えざりければ、なおこれかれに尋ね問うに一人の雑兵が進み出て、

「黄葉の刀自は宵の程に踏み留まって敵を支えて手痛く戦いたまいしが、一群繁き尾花の陰より敵の投げ掛ける鍵繩に馬の足を掛け倒されて生け捕られたまいき」と告げるに大箱ひどく怒って、

「さる事あれば、その折になどてや私に告げざりける。鳥澁の痴れ者かな」と罵って、既に軍法に行なわんとしてけるを桜戸、花的是らが諫め留めて、

「この雑兵の怠りは許され難きものなれども、敗軍の折なればその儀に及ばで逃けたるならん。未だ敵を討ち取らず、味方の雑兵を誅したまえばいよいよ敵に笑わるべし。まげて許させたまえかし」と等しく言葉を尽くせしかば、大箱もようやく怒りを収めつつ人馬の足を休めけり。

○かくて大箱は諸々の勇婦を集えて戦の評議をする程に、病葉の夏楊が進み出て、

「この地にはその名聞こえし上不見驚岩居あり。その勇婦は去ぬる頃、我々が事により祝部の大刀自親子の者と仲悪くありしより、此の度の戦には引き籠もり居て祝部を助けず。彼女を味方に引き入れたまえば此上無き助けにはべるべし」と云うに大箱頷いて、

「実に、彼の岩居が事をしも物に紛れて忘れてたり。私が自ら彼処に行つて面談に及ぶべし」とて桜戸、秦名、花的是、力寿らを残し留めて本陣を守らせ、その余の勇婦を従えて李野庄へぞ赴きける。

○ここに又、李野庄の上不見驚岩居は先に祝部の大刀自親子と確執に及びしより、此の度の戦を助けず、只閉じ籠もつて居る程に矢傷は既に癒えにけり。かかる所に江鎮泊の大箱がその手の勇婦を従えて訪い来ぬる由が聞こえしかば、岩居は眉をうちひそめ、

「彼の<sup>か</sup>大箱、小蝶<sup>さんせひめ</sup>らは三世<sup>さんせひめ</sup>姫を守り立てて京鎌倉<sup>むほんにん</sup>に弓を引く謀反人の者なるに我いかにして対面すべき。渡橋<sup>わたはし</sup>、彼処<sup>かしこ</sup>へ立ち出て、斯様<sup>かよう</sup>斯様に云いこしらえて、そのままに返せかし。内へな入れぞ」と云いつくれば渡橋<sup>わたはし</sup>は心得て物見の窓より遙か<sup>なつやぎ</sup>に見るに大箱の左右には夏楊<sup>いわひ</sup>、岩飛葉<sup>いわひ</sup>も在りしかば違<sup>たが</sup>わざりけりと一人語<sup>ひとりご</sup>ちて、雑兵<sup>ざっぴょう</sup>らを従<sup>したが</sup>えつつ出て大箱らに対面す。その時大箱は慇懃<sup>いんぎん</sup>に渡橋<sup>わたはし</sup>にうち向<sup>むか</sup>かって、

「岩居<sup>いわい</sup>の刀自<sup>とじ</sup>の猛<sup>たけ</sup>き名<sup>かね</sup>は予<sup>い</sup>ても伝<sup>い</sup>え聞<sup>き</sup>いたるに、此<sup>こ</sup>の度<sup>ど</sup>の戦<sup>いくさ</sup>に利<sup>り</sup>を失<sup>し</sup>って山桃<sup>もみじば</sup>、黄葉<sup>ゆうふ</sup>二人の勇婦<sup>ゆうふ</sup>を敵<sup>てき</sup>の為<sup>ため</sup>に生<sup>い</sup>け捕<sup>とら</sup>われ、その憤<sup>いきどお</sup>りに耐<sup>た</sup>えざれば、いかで教<sup>おし</sup>えを受けまく欲<sup>ほ</sup>しさにかくは推参<sup>おし</sup>しはべりき。この儀<sup>ぎ</sup>を申<sup>ま</sup>させたま<sup>たま</sup>えかし」と云<sup>い</sup>えば渡橋<sup>わたはし</sup>はうやうやしく、

「その儀<sup>ぎ</sup>は主<sup>すももの</sup>の李野<sup>い</sup>の岩居<sup>いわい</sup>も推量<sup>すいりょう</sup>してはべるから、い<sup>むか</sup>で迎<sup>ま</sup>え参<sup>まい</sup>らせて面談<sup>めんだん</sup>すべき筈<sup>はず</sup>なれども、いかにせん、矢傷<sup>やきず</sup>未<sup>い</sup>だ癒<sup>い</sup>えざれば今更<sup>いまさら</sup>に心<sup>こころ</sup>に任<sup>ま</sup>せず、これら<sup>これら</sup>の由<sup>よし</sup>を申<sup>ま</sup>し伝<sup>い</sup>えて辞<sup>こと</sup>し奉<sup>たてまつ</sup>れと云<sup>い</sup>われたり」と云<sup>い</sup>うに夏楊<sup>なつやぎ</sup>は進<sup>すす</sup>み寄<sup>よ</sup>り、

「ナウ渡橋<sup>わたはし</sup>殿<sup>でん</sup>。道<sup>みち</sup>に迷<sup>まよ</sup>わぬ目印<sup>めいしん</sup>の▼大柳<sup>おほやなぎ</sup>の並木<sup>なみぎ</sup>を敵<sup>てき</sup>こと如<sup>ごと</sup>く斬<sup>き</sup>り捨<sup>す</sup>てたれば、葉<sup>は</sup>にせん物<sup>もの</sup>無<sup>な</sup>くなりたり。そをいかにしてよからんや」と問<sup>と</sup>えば渡橋<sup>わたはし</sup>は微笑<sup>わいご</sup>んで、

「よしや柳<sup>やなぎ</sup>を切り尽<sup>き</sup>くすとも株<sup>くわ</sup>は必ず<sup>かならず</sup>残<sup>のこ</sup>って在<sup>あ</sup>らん。その切り株<sup>きりくわ</sup>を葉<sup>は</sup>にして昼<sup>ひる</sup>のみ戦<sup>いくさ</sup>を進<sup>すす</sup>めたまえば、道<sup>みち</sup>に迷<sup>まよ</sup>いは無<sup>な</sup>かるべし。大箱<sup>おほひらこ</sup>の刀自<sup>とじ</sup>も聞<sup>き</sup>こし召<sup>ま</sup>されよ。およそ此<sup>こ</sup>の所<sup>ところ</sup>には祝部<sup>いわふべ</sup>、胡沙田<sup>こさた</sup>、李野<sup>すももの</sup>の三家<sup>さんか</sup>あり。例<sup>れい</sup>えば鼎<sup>なべ</sup>の足<sup>あし</sup>の如<sup>ごと</sup>くに互<sup>たが</sup>いに助<sup>たす</sup>けとなるものから、私<sup>わらわ</sup>の主君<sup>ぬしきみ</sup>は祝部<sup>いわふべ</sup>と確執<sup>かくしつ</sup>によつて彼女<sup>かのじよ</sup>を助<sup>たす</sup>けず、只<sup>ただ</sup>彼の胡沙田<sup>こさた</sup>の輩<sup>ともがら</sup>は必ず<sup>かならず</sup>戦<sup>いくさ</sup>を致<sup>いた</sup>すべし。されば胡沙田<sup>こさた</sup>の胡沙丸<sup>こさまる</sup>は武勇<sup>ぶゆう</sup>並<sup>な</sup>々の相手<sup>あひま</sup>にあらず、力<sup>ちから</sup>あくまで強<sup>つよ</sup>くして、かつ又<sup>また</sup>、弓馬<sup>きうま</sup>が達者<sup>たつしや</sup>なり。祝部<sup>いわふべ</sup>の庄<sup>しや</sup>は東<sup>あづま</sup>にあり、胡沙<sup>こさ</sup>の庄<sup>しや</sup>は西<sup>にし</sup>にあり。かかれば東<sup>あづま</sup>を討<sup>う</sup>つ時は西<sup>にし</sup>を防<sup>ま</sup>がざればあやまちあらん。さてもその胡沙丸<sup>こさまる</sup>冠者<sup>かんじゃ</sup>は祝部<sup>いわふべ</sup>の熊姫<sup>くまひめ</sup>と許婚<sup>いいなづけ</sup>の親<sup>おや</sup>しみあり。これかれ必ず<sup>かならず</sup>力<sup>ちから</sup>を合<sup>あ</sup>わして合戦<sup>あひせん</sup>に及<sup>およ</sup>ぶべし。よくよく用心<sup>いんしん</sup>したま<sup>たま</sup>えかし」と云<sup>い</sup>うに大箱<sup>おほひらこ</sup>は喜<sup>よろこ</sup>んで、

「云<sup>い</sup>われる趣<sup>おもむき</sup>は心得<sup>こころえ</sup>たり。戦<sup>いくさ</sup>いに勝<sup>か</sup>つて勝利<sup>しんり</sup>を得<sup>え</sup>たらん時<sup>とき</sup>、又<sup>また</sup>、対面<sup>たいめん</sup>を願<sup>ねが</sup>うべし。よくよく伝<sup>い</sup>えたまいね」と暇乞<sup>いとまご</sup>いしつつ皆<sup>みな</sup>諸<sup>しよ</sup>共<sup>ども</sup>に陣所<sup>じんじよ</sup>とてぞ帰<sup>かへ</sup>りける。

○さる程<sup>ほど</sup>に大箱<sup>おほひらこ</sup>は岩居<sup>いわい</sup>が固<sup>かた</sup>く門戸<sup>もんこ</sup>を閉<sup>し</sup>ざして内<sup>うち</sup>へ入れざる事<sup>こと</sup>の趣<sup>おもむき</sup>を渡橋<sup>わたはし</sup>をもて云<sup>い</sup>わせたるその口上<sup>こうじやう</sup>は斯様<sup>かよう</sup>斯様<sup>かよう</sup>と花<sup>はな</sup>的<sup>てき</sup>、秦<sup>しん</sup>名<sup>な</sup>らに告<sup>つ</sup>げしかば、二人<sup>ふにん</sup>はこれ<sup>これ</sup>を聞<sup>き</sup>きながら、

「春<sup>はる</sup>雨<sup>さめ</sup>の刀自<sup>とじ</sup>がいや正<sup>ただ</sup>しく自<sup>おの</sup>ら赴<sup>おもむ</sup>きたまいしに、病<sup>やまい</sup>にかこつけ出<sup>で</sup>ても会<sup>あ</sup>わぬ。さても岩居<sup>いわい</sup>の無礼<sup>むれい</sup>さよ」と云<sup>い</sup>うに力<sup>ちから</sup>寿<sup>すけ</sup>はだみ声<sup>こゑ</sup>立<sup>た</sup>てて、

「思<sup>おも</sup>うにその岩居<sup>いわい</sup>めは姉御<sup>あねご</sup>の武名<sup>ぶな</sup>に恐<sup>おそ</sup>れしか、さらば三才<sup>みつご</sup>児<sup>こ</sup>に等<sup>ひと</sup>しくて人見知<sup>ひとみ</sup>りをする故<sup>ゆゑ</sup>なるべし」と云<sup>い</sup>うに皆<sup>みな</sup>々は「さもこそ」と答<sup>こた</sup>えてどつと笑<sup>わら</sup>いけり。

かくて次<sup>つぎ</sup>の日<sup>ひ</sup>大箱<sup>おほひらこ</sup>は祝<sup>いわふべ</sup>の庄<sup>しや</sup>を攻<sup>せ</sup>めんとて先手<sup>さきて</sup>の大將<sup>おほしやう</sup>を選<sup>えら</sup>ぶ程<sup>ほど</sup>に、力<sup>ちから</sup>寿<sup>すけ</sup>は早<sup>はや</sup>く進<sup>すす</sup>み出<sup>で</sup>て「私<sup>わらわ</sup>に命<sup>いのち</sup>じたまえ」と云<sup>い</sup>うを大箱<sup>おほひらこ</sup>は聞<sup>き</sup>きながら、

「そなたの先手<sup>さきて</sup>は不吉<sup>ふきつ</sup>なり。私<sup>わらわ</sup>が自<sup>おの</sup>ら先陣<sup>せんじん</sup>に進<sup>すす</sup>むべし」とて手分<sup>てわけ</sup>けを定<sup>さだ</sup>め、涼風<sup>すずかぜ</sup>、大鳥<sup>おおとり</sup>、飛子<sup>とびこ</sup>らをもて左右<sup>さゆう</sup>に備<sup>そな</sup>え、夏女<sup>なつめ</sup>、秦<sup>しん</sup>名<sup>な</sup>、琴<sup>こと</sup>樋<sup>ひ</sup>、河<sup>かわ</sup>堀<sup>ほり</sup>、岩<sup>いわ</sup>飛<sup>ひ</sup>葉<sup>は</sup>、夏<sup>なつ</sup>楊<sup>やぎ</sup>、白<sup>しろ</sup>粉<sup>こな</sup>らを二陣<sup>にじん</sup>と定<sup>さだ</sup>め、桜<sup>おう</sup>戸<sup>こ</sup>、花<sup>はな</sup>的<sup>てき</sup>、末<sup>すえ</sup>広<sup>ひろ</sup>、力<sup>ちから</sup>寿<sup>すけ</sup>らを三陣<sup>さんじん</sup>として下<sup>した</sup>貝<sup>かい</sup>、横<sup>よこ</sup>鯛<sup>たい</sup>らには本陣<sup>ほんじん</sup>を守<sup>まも</sup>らせ、この余<sup>あま</sup>腐<sup>く</sup>鷄<sup>かき</sup>、雌<sup>め</sup>雉<sup>けい</sup>らの諸<sup>しよ</sup>勇<sup>ゆう</sup>婦<sup>ふ</sup>を従<sup>したが</sup>えて祝<sup>いわふべ</sup>の庄<sup>しや</sup>へ押<sup>お</sup>し寄<sup>よ</sup>せけり。敵<sup>てき</sup>にも予<sup>い</sup>て備<sup>そな</sup>えあり。その勢<sup>いきほ</sup>およそ五<sup>ご</sup>六<sup>ろく</sup>百<sup>ひゃく</sup>人<sup>にん</sup>。その中<sup>なか</sup>に大將<sup>おほしやう</sup>と覚<sup>しやく</sup>しくて壘<sup>すゐ</sup>前<sup>まへ</sup>髪<sup>かみ</sup>なる美<sup>うつく</sup>少<sup>せう</sup>年<sup>ねん</sup>が馬<sup>うま</sup>をまっ先<sup>まへ</sup>に乘<sup>のり</sup>り出<sup>で</sup>すを知る者<sup>もの</sup>あつて告<sup>つ</sup>げる様<sup>よう</sup>、

「あの年<sup>ねん</sup>若<sup>わか</sup>き大將<sup>おほしやう</sup>はすなわち鳴<sup>なる</sup>子<sup>こ</sup>の弟<sup>てい</sup>にて胡沙<sup>こさ</sup>の庄<sup>しや</sup>の胡沙丸<sup>こさまる</sup>なり。万<sup>ばん</sup>夫<sup>ぶ</sup>不<sup>ふ</sup>当<sup>とう</sup>の勇<sup>ゆう</sup>あつて勢<sup>いきほ</sup>い大<sup>おほ</sup>波<sup>なみ</sup>の

打つに異ならねば、世の人遂にあだ名して青海原と呼びなしたり。ご用心を候へかし」と賢しら(でしゃばり)立って囁きけり。その時瀬那遣の腐鶏は若衆好きなる癖なれば▼手捕りにせんとや思いけん。馬に角入れ乗り進め、薙刀をひらめかして早胡沙丸に討って掛かれば胡沙丸も得たりと大刀抜きかざし人混ぜもせず戦うたり。互いに得たる技なれば、ちっとも騒がず丁々発止と打ちつ流しつ挑み争う、いずれに暇無きものから腐鶏は力衰えて敵し難くや思いけん。隙を見合わせ引き外し退き去らんとする程に胡沙丸はすかさずツツとおめいて腐鶏の薙刀をがらり丁と打ち落とし、ひるむをすかさずつと寄せて腐鶏の鎧の揚巻しっかと取って動かせず、目上高く差し上げて、たちまちどうと投げしかば、胡沙の軍兵は折り重なって縄を掛け引き立てて祝の城へ遣わしけり。

大箱の陣中より月夜笛涼風はこれを見て、腐鶏の仇逃さじとて馬を跳ばして討ってかかるを胡沙丸は物ともせず、又、引き掛けて戦うたる勢いあたるべうもあらざれば、又、大箱の陣中より花間田の大鳥も進み出て味方を助けて引き挟んでぞ攻めたつる。城中よりもこれを見て、加勢に来る胡沙丸を打たせはせじと鼓を鳴らして、大刀自の娘龍子、熊姫、武芸の師の金撮棒脱玉と諸共に大手の門を押し開き面も振らず斬っていざれば、大箱の陣よりも迅雷秦名と名乗ってまっしぐらに馳せいでたり。

※賢しら(さかしら): 利口ぶること。②自分の考えで行動する。③でしゃばる・こと。

かくて秦名は龍子と戦い、涼風と飛子、大鳥は胡沙丸、脱玉と挑み争う。大刀音を木霊に響かし何時果つべくも見えざりけり。かかりし程に秦名と戦う龍子は拳衰えて、やや負け色になりしかば、脱玉は彼女に代わらんとて大鳥らをうち捨てて、秦名を目掛けて馳せ行くを大鳥はなおやらじとて追いつたりつつ近づくと脱玉きつと見返って鉄の棒ひらめかし、只一打ちに大鳥を馬より下へ討ち倒し、見向きもやらず真一文字に秦名を討たんと進みけり。

その時大箱は「アレ花又☆を打たすな」と早く雑兵に下知しつつ、打ち倒されたる大鳥を助けて後陣へ遣わしけり。

さばれ秦名は脱玉が馳せ来るを見てちっとも騒がず、やがて龍子をうち捨てて更に脱玉と戦いけり。されば秦名は昨日の戦にて、その身の武芸の弟子なりける黄葉を虜にせられ、今日は又、腐鶏を生け捕られたりければ、只憤りが胸に満ち、一言の問答にも及ばず、三尺余りの▼大刀をひらめかし脱玉を討たんと進むを脱玉騒がず鉄の棒にてはっしと受け流し、互いに尽くす手練の働き、馬をしきりに乗り回し入れ違え入れ違え、半時ばかり戦うたる勢い云うべうもあらざれば、敵も味方も呆れ果て見物してぞいたりける。

既にして脱玉は予て謀りし事あれば、隙を見澄まし引き外し、馬を跳ばして逃げ走るを秦名はなおも逃さじとて駿馬に息もくれずして飛ぶが如くに追う程に、脱玉はいち早く林の内へ逃げ籠もるを見失わじと後を慕ってしきりに馬を走らせる。秦名は今この草むらに掛けたる縄を知らずして、たちまち馬の足を絡まれて馬は屏風を倒すが如くに身を横様に伏し転べば、主もひとしく落ち重なって起きんとうごめく程しもあらせず、伏せ勢左右にどっと起こって、やがて秦名を生け捕りけり。

飛子は遙かにこれを見て、齒を食いしばり眼を怒らし、秦名を救い取らんとてまっしぐらに寄せんとせしに、これも又、鍵縄にうたてや馬の足を取られて人馬ひとしくだうと転ぶを敵の雑兵が走り来て押さえて縄を掛けにけり。

その時祝部の城中より大刀自の二番娘の虎子は三百余騎を従えて城戸を押し開き走り出て、龍子、



熊姫諸共到大箱に目を掛けて押し包んで攻め立てれば、朧玉も又、取って返して息も継がせず揉んだりければ、大箱の一陣は崩れ立って右往左往に奔走す。かかる所に後陣の花的、夏女、末広らが手勢を進め助け来て、ようやく敵を討ち退け、皆大箱を守護しつつ道七八丁ほど退く程に、青海原の胡沙丸は手勢を進めて追っかけて来て、

「大箱逃ぐとて逃さんや。命惜しくば降参せよ」と呼び張り、呼び張り、攻め討ちたる勢い世の常ならざるに、力寿、琴樋、横鯛らは遠く隔たり手に合わず、ここに有りつる勇婦らは数刻の戦いに疲れ果て防ぎ戦うに及ばねば、聞かぬ振りして逃げ走るを胡沙丸はなお逃さじとて隙間もあらせず追っかけたり。

かかる所に桜戸は遙か後辺に引き下がり敵を支えてありしかば、遅れ早馳せに走り来て、大箱の危うきを見るよりちっともたゆた※はで胡沙丸にうち向かい、「小倅待ちね」と呼び掛ければ胡沙丸はきっと見返って、▼

「あな、物々しき倅呼ばわり。この世の暇を取らせんず」と罵る声と諸共に大刀をうち振り打たんと進むを桜戸は見つつあざ笑い、

「我が相手には足らねども、女の中の色若衆の志の殊勝さに手並を見せん覚悟をせよ」と云われて胡沙丸はいよいよ怒って、又、問答にも及ばばこそ、真つ向望んで打つ大刀を桜戸は丁と受け流し、しばらく挑み戦いけり。

※たゆた：心が不安で揺れ動き、定まらないでいるさま。

青海原の胡沙丸は武芸勇力世に優れたる若者なりと云うと云えども、いかでか桜戸に優るべき。しばらく挑み戦う程に、大刀筋ようやく乱れしかば桜戸すかさず付け入って刃を丁と打ち落とし馬上ながらに引き組んで小腕取って動かせず、鎧の上帯に挟みたる用意の早縄取り出して、手早く厳しく縛めて雑兵に渡しけり。桜戸のこの働きを見る者聞く者押しなべて、近頃内田の三郎と組み打ちしたる巴にも勝りにけりと舌を震って、味方は感じ敵は恐れて、又、追わんともせざりしかば、大箱はやや虎口を逃れて軍兵を引きまとめ、諸々の勇婦と諸共に元の陣所にたむろして初めて息を付きにけり。

さる程に桜戸は生け捕りたりける胡沙丸を本陣に引かせ来て実見に入れしかば、大箱は斜めならず喜んで、且つ桜戸の軍功を感ずる事大方ならず。生け捕りたりける胡沙丸をば江鎮泊へ遣わして、末広、河堀らの親なりける蟹部の木工六が預かっていたわるべしと云い遣わし、又、朧玉に打ち倒されて痛手負ったる大鳥をも近江へ帰し養生させしに、日を経てその傷は癒えにけり。

かかりし程に江鎮泊より智恵の海の呉竹は二網、五井、七曲、筒鳥、薄衣らの五人の勇婦諸共に五百余りの雑兵を従えて大箱の▼陣所に来にければ、大箱喜び出迎えて、まず三世姫の安否を問いたてまつ奉り、さて敗軍の体たらくを物語りつつ又、云う様、

「先には地の理を知らざりければ、山桃と黄葉を敵の為に虜にせられ、その後、又、腐鶏を生け捕られて秦名、飛子も鍵繩に掛け倒されて捕らわれたり。これのみならず大鳥は金撮棒朧玉に討たれて痛手を負いはべり。我が身も既に危うかりしを幸いにして桜戸が比類無き働きして青海原胡沙丸を生け捕りたるによってこそ、いささか恥を清めたれ。もし祝部を攻め滅ぼしてこれらの恨みを返さずば、今更何の面目あって姫上に見参し小蝶の刀自に見えんや。心の内を察したまえ」と云いつつ嘆息したりしかば呉竹はこれを慰めて、

「さのみ心を勞したまうな。敗軍の事の趣を賤の砦へ聞こえしかば、すなわち小蝶の下知として、我々五人に雑兵を五百余人付けさせて、只今着陣してければ、既に新手の助けあり。これにても事は足るべきに、彼の祝部の大刀自らの滅亡の時節は到来したりけん。私出陣の折からに、思い掛け無き助けを得たり。これより内通外合の謀り事を施して容易く敵を滅ぼすべし。これらの由はゆるやかに説き示し参らせん。まずくつろいで、酒でも過して※心の憂さを慰めたまえ」と世に頼もしく云われしかば、大箱いよいよ喜んでやがて盃をすすめつつ、呉竹ら五人の勇婦をいと懇ろにもてなして桜戸、花的、夏女の輩を落ちも無く呼び集いて戦の評議をしたりける。

既にして盃が再び三度巡りし折、大箱は呉竹が助けを得たりと云いし事、又、その謀り事の赴きを聞かま欲しとて尋ねるに呉竹答えて、

「然ればとよ。私が出陣の折からに、かねて桐火桶石竹が相知りたる百林古雛、川社雛形と呼ばれる叔母姪二人が六人の勇婦を伴いつつ三世姫に仕えんとて越後の国より来たるなり。その中に彼の祝部の龍子、虎子、熊姫らの武芸の師と聞こえたる金撮棒肌玉と▼同門の好ある者あり。これ屈強の者なれば、彼女らをもって内応の謀り事を行わせて、敵を一時に滅ぼすべし。まずまず彼女らの来歴をつまびらかに聞こえはべらん。静かに聞かせたまえ」とて、その物語りに及びける。

※過ぐす(すぐす): ①通過させる。やりすぐす。 ③限度をこす。すぐす。

○此の頃、越後の国三国峠の麓村に幸目、狩倉と云う姉妹ありけり。父はその村の郷士なりしに二親共に世を去りぬ。しかるにその姉妹は心あくまで猛くして女に似気無き武芸を好んで、大刀合わせ弓射る技をひたすらに好みしかば、村人らも皆恐れて婿にならんと云う者無し。この故に彼の姉妹は狩り人の業を事として己がままに世を渡りしかば、里人は彼女らにあだ名を付けて姉を山又山の幸目、妹をとまりやまの狩倉とぞ呼びなしける。されば又此の所は北条義時の親族なりける。越後之介時秋の領分にて、時秋在国の折から、ある夜の事なりしが荒熊が厩の壁を壊ちて秘蔵の名馬を盗ってけり。時秋は安からぬ事かなとて領分の狩り人らにその由を触れ知らせ、

「ここの山に住む熊を皆狩り尽くして参らすべし。熊一匹を討ち得し者には一千貫の褒美を取らせん。もしなおざりにして日を過ぐす者はきとその罪を正すべし」と、いとおごそかに下知しけり。これにより狩り人ならぬ者までも領主の御感に預からんとて狩り暮らす者多しと云えども、熊は生憎(あいにく)※に深く隠れて狩り人の人の目にかからねば捕り得る者は無かりけり。

さる程に幸目、狩倉も領主の下知に従って夜毎夜毎に山狩りしつつ、熊道を尋ねる事が三夜さばかりに及びし頃、三国山に分け登るにいつべき月の未だいでねば、姉妹は株に尻を掛け互いに背をうち合わせ、しばらく微睡みたりけるに、たちまち弦音がしてければ姉妹等しく驚き覚めて辺りをきっと見返るに、いと大きな荒熊が毒矢に手負いぬと覺しきが此方を指して走り来て、姉妹は「得たり」と手鐙を持って早突き止めんとする程に、熊はしきりに猛り狂って突けども打てども物ともせず、峠の方へ走り行くをなお逃さじと追う程に、熊はその身に負いたりける毒矢にようやく勢い衰えてたちまち崖を踏み外し、もどりを打ちつつ千尋の下へ投げけるが如く落ちてけり。

その時幸目、狩倉は喘ぎ喘ぎ追っかけ来つつ熊が落ちたるを見定めて、姉妹やがて談合する様、「只今熊の落ちたる所は大庄屋毛太夫殿の奥庭に疑い無し。いでや彼処へ赴いて、主に断り熊を求めん。さあさあ」と諸共に急がしつ急がされて、等しく麓に赴きつつ彼処へ走り着きし頃に夜

は白々と明けにけり。

さればこの地の大庄屋を脛坂毛太夫と呼びなしたるが、その家極めて豊かにて召し使う男ども  
数多あり。しかるに此の朝思いがけ無く幸目、狩倉が音ないて（訪れて）※対面を乞うにより、いでて  
その由を尋ねるに姉妹は答えて、

「我々昨夜、三国山にて手負える熊にいで会いつつ、突き留めんとする程に、熊は崖より踏み外し  
て此方の園へ落ちはべりき。痛手に弱りし物なれば、そこに在らん事疑い無し。願うは彼の荒熊を  
尋ねて得させたまえかし」と云うを毛太夫は聞きながら、

「そはいと易き事なりかし。各々は昨夜終夜、山狩りに疲れたまいけめ。まず朝飯を参らせん。し  
ばらく休息したまえ」と、答えてやがて酒をすすめ、飯をもすすめてもてなしけり。

※音（おと）：①音。②うわさ。評判。③たより。おとずれ。④返事。応答。

これにぞ時も移りしかば、姉妹しきりに彼の熊を尋ねさせたまえと共に催促して止まざりければ、  
毛太夫ようやく身を起こし、

「しからば、此方へ来たまえ」とてうち連れ立ちつつ、園に出て植え込みより奥庭まで落ちも無く  
見巡るにその熊は無かりけり。

その時毛太夫が云う様、

「彼の折は夜中の▼事なれば、各々は我が庭へ追い落とせしと思ひしはおそらくそは僻目（見間違い）  
※にて所を違えるものなるべし。なお又、余所を尋ねたまえ」と云うを姉妹は押し返し、

「そは宣う事ながら、まさしくここらへ落ちたるを上より定かに見留めはべれば、いかでか所が違  
うべき」と云うを毛太夫はあざ笑い、

「しからば又、その熊がここらに無きはいかにぞや」と詰るを姉妹は聞きながら、

「よしやその熊無しと云うとも地上に引きたる血潮あり。かばかり正しき証拠あらんや。思うに早  
く熊を隠して、その身の手柄にせんと計りし巧みの程は知られたり。さあさあいだしたまいね」と  
云はせも果てず、毛太夫は眼を怒らし、声苛立てて、

「疑い深き無法の雑言。察するに汝らは女世帯の煙りをたてかね、悪心起こって云い掛かり、強請  
りの巧みをなすと覚えたり。素直に去ねば許してくれん。異議に及ばば引っこくり、辛き目見せん。

覚悟をせよ」と、あくまで罵る庄官の權威にひるまぬ幸目、狩倉は共に怒れる声高く、

「この死にさがりの親爺めが、女と思ひ侮って、權威に誇る逆捻は強請りかたりに輪を掛けし、大  
盗人め。熊を出せ、いだせ、返せ」と詰めかけ詰めかけ、激しき勇婦の勢いに争いかねたる毛太夫は  
濁声高く振り立てて、

「者ども出て、盗人女を絡め捕らずや。さあいでよ」と呼び張る声に男どもは「おう」と答えて五六人、  
手に手に棒をひらめかし、早ひしひしとおっとり込めて打ち倒おさんと競いかければ、幸目、狩倉い  
よいよ怒って、「物々しや」と左右に引き受け、かいくぐりかいくぐり、からりからりと棒を打ち落  
とし、かい搦んでは投げ飛ばす、女に稀なる姉妹の武芸勇力思うにまして当たるべうもあらざれば、  
主人は更なり男共も頭をかかえ逃げ失せて、いで会う者は無かりけり。

※僻目（ひがめ）：①視線の方向が正常ではない目。やぶにらみ。②見まちがひ。③偏見。

その時幸目、狩倉は奥をにらんで声高やかに、

「毛太夫、何処に隠れたる。不足無き身が飽く事知らず、我々が追い落としたる熊を奪ってあまつさえ非法の手向かい事をかしゃ。此の由を介殿に訴え申して明さ暗さを立てて見せん。覚えていよ」と罵り捨てて、「いざ行くべし」と姉妹ひとしく領主越後之介時秋の問注所を指して赴く程に、道にて毛太夫の子なりける毛源太に行き会いけり。

幸目、狩倉はこれを見て、忙わしく呼び留め、

「我々は昨夜、三国山にて手負える熊を追い落とせしに、その熊は御身の宿所の庭へ落ちしを定かに見たり。よって今朝しも推参してその熊を求めしに、御身の父御は心汚く熊を隠して渡したまわず、あまつさえ男共を呼びたてて絡め捕らせんとせられしかば、我々怒りに耐えずして、由を訴え申さん為に上の問注所へ参るなり。この儀を知って御座するか」と問われて毛源太は眼を見張り、「そは思いも掛けぬ事なり。我らは昨夜親類許の酒宴に招かれ、夜が更けしかばそこに明かして、只今帰宅す。我が親は老もうして無理なる事もままこれあり。主の下知に▼従うたる男どもは云うにしも足らず、我ら宿所に立ち帰り、親を諫めてその熊を御身たちに返すべし。まげて堪忍したまいね」と云われて姉妹は気色を柔げ、

「熊をだに返したまえば又、その上に言い分あらんや。我々は女の事なるに村長を相手にして公沙汰は引くに引かれぬ。その訳のあればなり。無事こそ願う所なれ」と云うに毛源太も喜んで、

「しからは我ら諸共に、さあ来たまえ」と先に立ち、やがて宿所に伴いつつ、まず早親を諫めんとて忙わしく退きたる。その隙に毛源太は前後の門を閉ざさせて、たちどころに用意を調べ、たちまち声を振り立てて、

「者ども、この姉妹の盗人女をさあ絡めよ」と呼び張る声と諸共におっと答えて男どもは数を尽くして十四五人、むらむらと走り来て、幸目、狩倉をおっとり込めて早八方より組み付いて、手を取り足を押さえつつようやく縄を掛けにけり。

さすがに猛き姉妹でも、毛源太に計られて油断せし折なりけるに、下人なれども大勢に不意を打たれて防ぐに由無く遂に縛められたれども、重ねて人を寄せ付けずに引きたてんとせし者どもを或るいは蹴倒し踏みにじり、姉妹は怒れる声を振り絞り、

「あな毛源太の偽り者めが、我々に何らの咎はある」と云わせも果てず毛源太は襖を開いて現れ出て、

「愚かなり、幸目、狩倉。昨夜汝らが我が庭へ追い落とせしと云うその熊は三国山にて我が矢先に掛けて射止めし物なれば、未だきに上に参らせて只今帰宅しつるなり。しかるに返って汝らは人の獲物を奪わんとて云い掛けをせしのみならず、村長の宿所を騒がせても、そを盗人にあらずと云わんや。これらの由を訴え申して悪事の報い思い知らせん。覚悟をせよ」と罵って、村人数多を呼び集え、遂に幸目と狩倉をはんだ乗り物にうち乗せて領主の問注所へ参らせけり。

これにより毛太夫は一財布の銭と金を彼女らが盗み取りとらんとせし贓物☆なりと云いこしらえ、その身は訴え文を懐にして共に領主の館へ行きけり。されば又、当国の守の越後之介時秋の陣代に鬘綿九郎と云う者あり。彼の妻は毛源太の妹なりければ毛太夫の為には婿なり。ここをもて幸目、狩倉姉妹共に押し片付けて古き恨みを返さんとて、毛太夫は綿九郎に心の機密を囁きければ綿九郎は心を得て、遂にその私の計らいを為す事多かり。さても脛坂毛太夫親子が執念くその姉妹を罪ない殺さんと目論みたる事の元を尋ねるに、幸目、狩倉の父親は所に久しき郷士にて心正しき者なりければ、毛太夫がその年頃、上にへつらい、▼土民を虐げ、萬に私の計らい多かりける非法の行

いを見聞くにつけて一人しきりに憤<sup>いきどお</sup>り、いかでか彼奴<sup>かやつ</sup>の奸曲<sup>かんきよく</sup>を領主<sup>つば</sup>へ詳らに聞こえ上げて諸人<sup>もろびと</sup>の憂<sup>のぞ</sup>いを除かんとて、心ある里人と忍び忍びに語らいしをその事<sup>こと</sup>をしも果たさずして卒中風<sup>そっちゅうふう</sup>にて身罷<sup>みまか</sup>りけり。

しかるを子どもは云い甲斐も無き女なればとて始めよりその一議<sup>さちめ</sup>を告げざりければ、幸目<sup>かりくら</sup>、狩倉は知らざりしに、いかにかしけん毛太夫<sup>けだゆう</sup>は後にほのかに伝え聞き、いと恨めしく思うものからその人は世を去って過ぎ越し方の事なれば、誰に報わん由も無く、言にだも云さでなりけるに、今図らずもその娘らが我が子<sup>す</sup>の毛源太<sup>けげんた</sup>が矢先<sup>やさき</sup>にかけたる荒熊<sup>むく</sup>を求めるとて漫ろに争いを起こせしかば、彼女らは我が仇<sup>あだ</sup>の娘なり。この便宜<sup>びんぎ</sup>をもて落とし入れて古き恨みを返さんとて、事のここに及べるなり。これよりの後<sup>か</sup>彼の姉妹は罪ならぬ罪<sup>とら</sup>に囚われて厳しく牢屋<sup>ひとや</sup>に繋がれつつ、命も既に危うかりける。

その事の趣<sup>おもむき</sup>は十一編に著すべし。今年<sup>やまさ</sup>は八巻と精を出して、十一編また十二編まで綴りなし、年内出板待つは久しき物ながら、年々に見て呉竹の世の見物がた、御評判、御評判。

<翻刻、校訂、翻訳：滝本慶三 禁転載 底本／早稲田大学図書館所蔵資料>